

山田俊藏
大角豊次郎 著

近世事情

三

210.61

Y219k

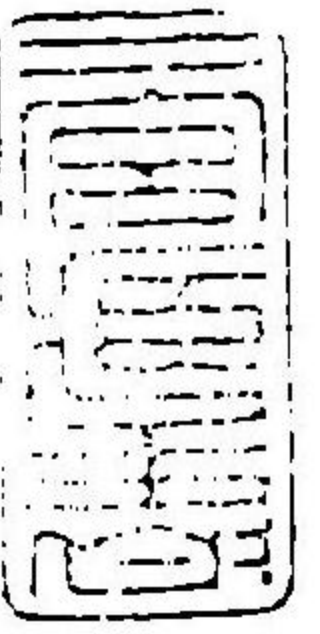
560
2
2

山田俊藏著
大角豐次郎

近世事情

版權
免許

大角具精



近世事情序

天下治而文物之盛也。人或徒知_レ其為盛。且治而不志_レ盛。與治因_レ繇_レ于教化之隆。之_レ紀綱之張。在_レ取其所謂盛。子治者。托_レ法_レ天運。以為至治極盛之世。般樂怠教。委_レ備_レ成風。於_レ使_レ教化。替_レ而_レ紀綱弛者。古_レ今_レ之通弊也。噫。識者_レ可_レ不_レ留

560
2
2

近世事情序

天下治而文物之盛也。人或徒知_レ其為盛且
治而不_レ志_レ盛與治因_レ繇_レ于教化之隆_レ。孔網之
張_レ。在_レ取_レ其所謂盛_レ。治者。托_レ法_レ天運_レ以為至
治極盛之世。般樂急教。素傷成風。終使教化
替_レ而紀綱弛_レ者。古_レ之通弊也。噫。識者_レ。不_レ當



意于茲乎哉。曩山田對灣撰近史名曰近世
史情其初為阮公於世。今復將上二編三編
于梓乞余序。余觀其書自萬延至明治上
下几十年間中興之功業開化之進步與逆
世後傑之有自主自由之志有艱難辛苦之
行以能立濟世利民之大業莫弗記載

焉。間亦加以其平日所見其論皆能統述
稽之推情索之審時勢察變理條分
縷析可謂痛快矣。余以謂對灣此舉蓋有
深意焉。夫嚮方

主政一新之運英豪輩出大修而政類興廢
典則言路舉賢才能翔

王室以致今日之開化。不亦偉哉。雖然。法久而弊生。治久而倍索。理勢之當然也。今雖極盛之世。豈無徒知盛于治而不知其所以由來者哉。於是乎。察機於未萌。保治於無疆。使人。鑒於前。勵於後。益進。方今之開化。實在今日。是對灣之所以有此舉也。然則。

近世之紀。史者。無善于對灣。而對灣紀事之書。莫善于此篇。故苟為皇國之民者。讀此書。勇往直進。確然砥礪志行。是對灣之所期也。不然。則對灣之志荒矣。余深望。後者之反覆致思也。書以為序。

明治七年三月 中邨清齋撰

入谷邨表梅堂書



近世事情 綱領條目

萬延元年ヨリ文久二年ニ至ルマデ三年間ノ
開化進歩ニ關スル紀事

始テ米國ニ使節ヲ遣ル事

水戸藩勅詔ヲ納ル、事ヲ以テ動搖スル事

櫻田ノ變

有村治左衛門ノ勇武絶倫ナル事

佐野竹之介ノ歌

大關和七郎森五六郎等ノ自首

佐野齋藤氏等ノ訴書

彦根藩ノ歎願書

大關杉山氏等ノ幕吏ニ激答スル事

官田瀨共衛ノ剛毅屈セザル事

高橋父子ノ大阪ニテ自刃スル事

高橋莊左衛門ノ詩

塩谷甲藏ノ建論

窮鼠却テ猫ヲ噬ムノ譬喩

改元ノ令

外國人ノ陰謀

皇子祐官儲君トナル

英人富士山ニ登ル事

水戸老侯薨ス

幕府和官ノ降嫁ヲ請フ事

水戸藩薩州侯ニ接見ノ先鋒ヲ請フ事

祐官儲君皇太子トナル

堀織部正ノ安藤對馬守ガ五大罪ヲ責ムル

書

幕府公卿一同ニ金一万五千圓ヲ贈ル

米國書記官「ウスケ」要殺セラル事

水戸藩常總ノ間ニ蜂起ス
 近畿ノ窮民ヲ賑ハヘル詔書ノ略
 幕府大ニ浪士ヲ捕フ事
 水戸浪士ニ檄文
 文武ヲ勉勵セシメルノ幕令
 魯人ノ對馬ヲ狼籍スル事
 皇妹和宮ヲ内親王トナス
 東山ノ松樹倒ル
 浪士東禪寺ニ侵入スル事
 柳鏡三郎等ノ懷書

英人始テ日本海ヲ測量スル事
 御殿山ニ外國人旅館ヲ築ク事
 英公使對馬ノ地ヲ魯人ニ假スルヲ怒ル
 和宮東下ノ首途ヲナス
 長州侯ガ治國ノ大基本ヲ立テスル事ヲ論
 スル上書ノ略
 茶禿蒼翠ノ建論
 大和春日社ノ神鏡故ナク裂ク
 坂下ノ兵
 甲田顯三等ノ懷書

幕府耶蘇教ノ人ヲ捕フ

長州侯ノ久世大和守ト激論スル事

薩州侯ノ藩士ヲ諭スル事

永井雅樂ノ京師ヲ遊説スル事

平野次郎等ノ義舉

島津和泉ノ入京スルヲ閉テ幕吏ノ狼狽スル事

奈良原喜八郎ノ勇断

幕吏ノ怯懦動カシ易キ事

嶋津和泉三郎ノ名ヲ賜ハル事

阿州侯ノ將軍上洛ヲ拒ム建言

津侯ノ上洛ヲ勸ムル上書

長州侯ノ肥後侯ニ贈ル書

熊本藩一同ノ藩主ニ上ル建論

勅使大原正三位ノ東下スル事

榎本益次郎等ノ洋行

伊藤軍兵衛ノ東禪寺ニテ英人ヲ殺ス事

島田左兵衛暗殺セラル事

生麥村ノ變

薩長土三藩ノ威望諸藩ニ冠タル原由

會津侯京師守護職トナル
戸田和三郎大和守トナリ山陵ノ荒蕪ヲ修
ムル事

本間精一郎ノ暗殺セラル事

幕府諸侯ノ夫人ヲ本國ニ就カシムルノ天
改革

宇野玄蕃ノ天誅セラル事

淺邊金三郎等數人モ殺サル

後醍醐天皇ノ廟故ナク震動ス

岡侯東下セシテ浪士ニ逼ラル事

彦根侯十方石ヲ削ラル事
勅使三條中納言ノ奉スル勅書ノ略
塙沢郎要殺セラル事

卷之四

文久三年ヨリ元治元年ニ至ルマデ二年間ノ

紀事前ノ如シ

池内大學ノ天誅セラル事

賀川肇ノ暗殺セラル事

鷹司右府關白トナル

青蓮院宮ノ中川宮ト稱スル事

英人生麥村ノ事ヲ以テ贖金五十萬元ニ募

府ニ督責スル事

浪士足利三將ノ木像ヲ斬ル事

長門少將ノ建論

將軍上京シ金ヲ洛中ノ民ニ賑フ

賀茂ニ行幸アリ

嶋津三郎京師ヲ脱スル事

壬生浪士新徴組トナル事

男山ニ行幸アル時將軍ハ供奉ヲ辞スル事

新徴組ノ首謀清川八郎殺シル

一攝中納言ノ東下スル事

小笠原壹岐守ノ鎖港ヲ各國ニ告ル事

幕府英人ニ贖金四十五萬元ヲ與フ

長州藩撥夷ノ嚆矢ヲナス

姉小路少將要殺セラレ

米船長州下關ヲ襲フ事

佛船長門ヲ襲フテ小倉藩之ヲ傍觀スル事

小笠原壹岐守等上京シテ將軍ヲ強奪セシ

トスル事

監軍勅使長州ニ下ル

英人薩州ニ逼テ贖金三萬元ヲ得ントス

幕府密監察使ヲ九州ニ下ス

阿州藩誤テ幕船ヲ撃ツ

長州藩モ亦幕船ヲ撃テ大ニ幕使ヲ窮蹙セ

シタル事

幕使中根一之允長州ニテ暗殺セラル

大和ニ行幸アラントス

大和五條ノ乱

八月十八日ノ變即チ三條以下七卿ノ長州

ニ脱走スル事

長州ノ黨大ニ罰セラル

天忠組松本謙三郎等決戦スル事

近衛公ノ關白鷹司家ニ呈スル書

十津川ノ舉

津彦根等ノ兵天忠組ヲ平定スル事

備藝以下六侯建言シテ薩長三侯ヲ輩下ニ

召サント請フ

長州侯ノ歎願書

嶋津三郎再々入京シ為ハ所アラントス

外夷ノ事ハ都テ幕府ニ任スルトノ朝令

近世... 目錄... 九角...

銀山ノ兵敗レ平野二郎等捕ヘラレ

南八郎ノ怯士ヲ嘲ケル狂歌

平野氏ノ歌

島津三郎ノ奏議

長州侯ノ藩士ヲ説諭スル文

中川宮尹ノ宮ト稱スル事

二條公關白トナレ

井原主計ノ歎願スル事

薩船長州藩ノ為ニ沈メラレ

鳥取侯ノ建論

翻覆ノ論旨

長州侯ノ歎訴

三條公ノ建言

會津侯五万石ヲ加増ス

將軍ノ勅意ニ答フル事

島津三郎ノ藩士ヲ告諭スル事

五條ノ黨誅セラル事

島津三郎ノ建言

長井精一郎等浪華ニテ自裁スル事

藤田小四郎ノ兵ヲ擧グル事

下... 上...

正義黨奸黨ノ派ヲ各少事

大權ヲ幕府ニ委任スル勅詔

新法六條

池田屋總兵衛樓上ノ變

平岡團四郎等要殺ニテ事

福原越後ノ上京スル事

朝紳ノ怯懦

京師ノ謬傳

福原氏ノ智辨

佐久間象山要殺ニテ事

益田衛門山崎ニ來ル事

長藩征討ノ檄文

蛤御門ノ變

内田弥三郎ノ驍勇

來嶋兒玉等ノ再舉

山崎ノ役

鷹司邸ノ變

中村恆次郎ノ勇武無比

一橋公ノ朝紳ニ激答スル事

久坂義助等ノ明断

長州藩
目録

福原氏伏見ヲ發スル事

小原仁兵衛ノ偽計

桂勝三郎ノ勇進スル事

平野次郎ガ辞世ノ歌

真木和泉ノ諭言

長兵衛西歸ヲ議スル事

真木松山氏ノ勇決

會津藩ノ大ニ欺カル事

真木氏ノ歌

使番新見内膳ノ驍勇

大角氏藏版

幕府長州邸ノ儲米ヲ奪フ事

外國使節筑後守等罰セラル事

長防追討ノ令

洋船長州ヲ襲フ

長藩ノ和ヲ洋船ニ請ヘル事

長州侯ノ亀井侯ニ呈スル書

筑波山殆ト保タザラントス

武田耕雲齋ノ藤田等ニ與スル事

長州侯謝罪ノ書

各國公使贖金ヲ逼ル

長州藩

目録

十

大角氏藏版

幕府長州侯邸ノ家什ヲ燒ク事

江戸ノ戸數

股屋卯三郎ノ死ヲ賜ハル事

林伊太郎ノ拔擢セラル事

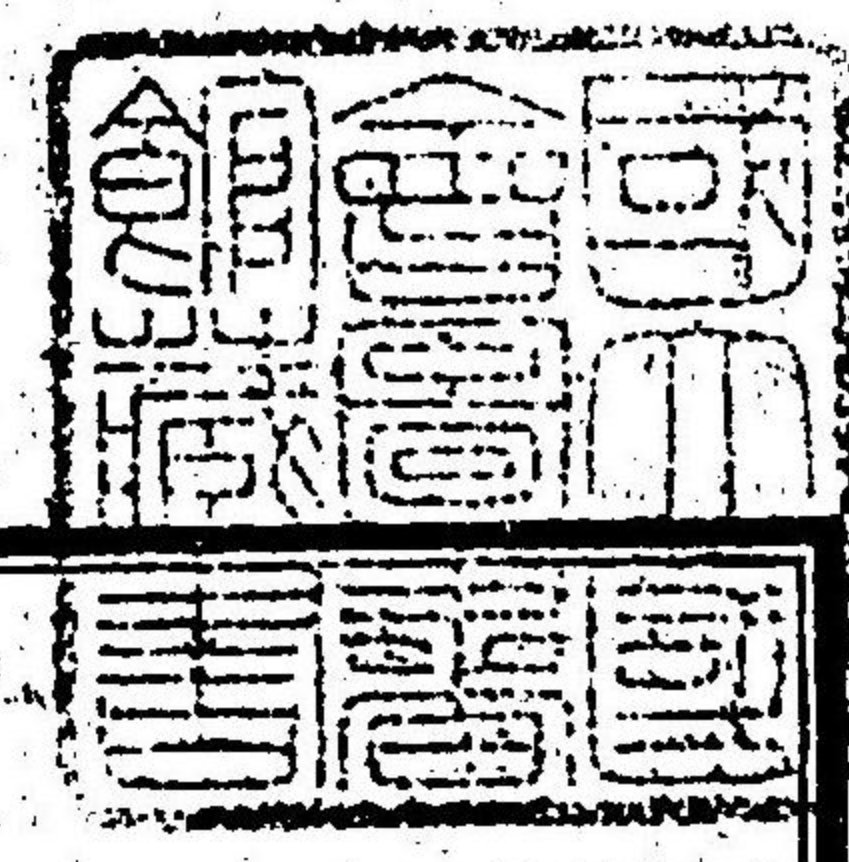
尾張大納言ガ七卿ノ處置ヲナス事

益田國司福原三氏ガ絶命ノ歌

耕雲齋ノ詩

通計百八十章

近世事情卷三四綱領條目 終

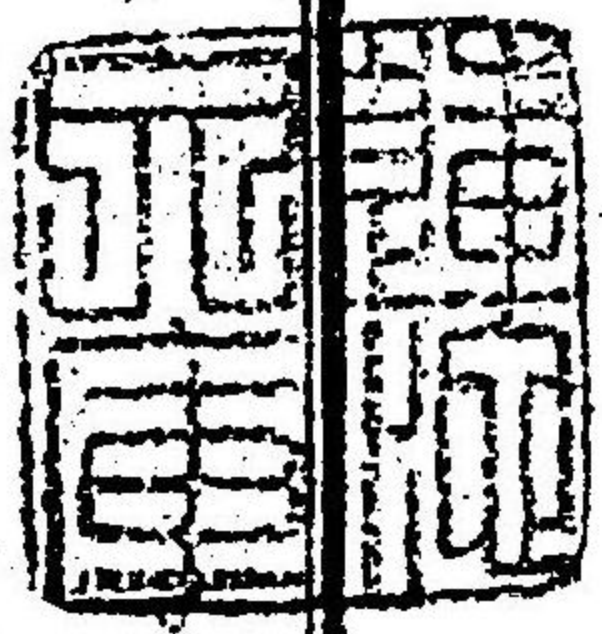


萬延元年始テ
米國ニ使節ヲ
遣ス

山田俊藏
太田善治郎著 近世事情卷三

萬延元年ヨリ文久二年ニ至ルマデ三年間ノ

開化進歩ニ關スル紀事



孝明天皇萬延元年正月十三日幕府淡路守村垣

範正豊前守新見正興木村攝津守小栗豊後守勝

麟太郎等數十人ヲ米國ニ遣ス○十八日攝津守

等島津氏献スル所ノ太元丸ニ乘リ加奈川ヲ發

ス尋ヒテ村垣範正以下數十人米船ニ附乗シ之

ヲ嚮導トナス○二十八日幕府令シテ西洋流ノ

水藩動搖

調練并ニ同太鼓ノ誓古ヲ禁ス○二月四日朝鮮
 聘使来ル將軍ノ新ニ職ヲ襲クヲ賀スルナリ○
 五日横濱ニテ英人一名蘭人一名殺サル何人ノ
 ナス所ヲ知ラス○十八日水戸ニテ藩士勅諭ヲ
 納ル事ヲ以テ大ニ争鬪ス是ヨリ先ニ幕府朝議
 ヲ俟タズ外國ト條約ヲ結ヒ且尾水越三家ヲ罰
 スル等ノ事アリテ物論紛々タレバ京師ヨリ幕
 府ヲ輔ケ外夷ヲ接フベキノ勅諭ヲ水戸前中納
 言ニ下セドモ井伊中將等幼君ヲ挾ミ威ヲ海内
 擅シ毫モ中納言ノ言ヲ採ラザルノミナラズ

櫻田

却テ之ヲ禁錮シ且其事ニ與カル者ニ至ルマテ
 悉ク罰セザルナカリシガ是ニ至テ其勅諭ヲ納
 メシメントス故ニ水藩動搖スト云○二十五日
 夜横濱ニテ邏卒一人外國人ノ為ニ銃殺セラレ
 ○三月三日水戸藩佐野竹之介黒澤忠三郎鹿兒
 島藩有村治左衛門等十七人共ニ大老掃部頭井
 伊直弼ヲ外櫻田ニ撃テ之ヲ斬ル彦根藩喪ヲ秘
 シテ發セズ是日ヤ飛雪霏々トシテ已ニ積ル
 三尺道路殆ト辨セザルガ中將上已ヲ賀スル為
 メ將ニ登城セント復輿ニ乘リ從者ヲ具ヘ喝道

シテ櫻田門外ヲ過ルニ方リ水戸ノ黨雨衣ヲ穿
 チ竹笠ヲ戴キ銃ヲ袖ニシ劍ヲ懐ニシテ或ハ濠
 上ニ潜伏シ或ハ路傍ニ山轎ヲ置キ其側ニ跪ケ
 ルガ忽チ簑笠ヲ穿チタル奴装ノモノ一人事ヲ
 訴ント偽リ中將ノ輿側ニ近ツカントス時ニ衛
 士等之ヲ尋常ノ訴人ト視テ唯退ケト叱スル
 ノミナレバ訴人再ビ進マントスルヤ同志ノモ
 ノ六七人銃ヲ放チ白刃ヲ抜キ跳テ前驅ヲ襲フ
 前驅大ニ騷擾シ聲ヲ齊クシテ狼藉者ト呼ベハ
 輿側ノ衛士意ヲ輿ニ留メズシテ之ニ向フ是ニ

狼藉者

於テ訴人ト偽レルモノ直チニ簑笠ヲ脱ニ腰刀
 ヲ抜テ輿下ヲ斫ントス昇竿ニ遮ラレ僅ニ其肩
 ヲ斬ル輿下之ヲ見テ狼狽逃走ス是時嚮ノ濠上
 ニ潜伏セルモノ亦皆雨衣ヲ脱シテ輿側ニ乱入
 シ奮撃ヘルヲ殆ト闌テレバカノ路傍ニ置ケル
 山轎ノ内ヨリ黒羽ニ重ノ濶袖ヲ着テ小袴ヲ穿
 チ肩ニ白襷ヲ着テ手ニ短槍ヲ挈ゲタル壯年ノ
 モノ出テ来リ隙ヲ偵フテ急ニ輿側ニ迫リ自ラ
 陸州藩有村治左衛門ト呼ヒ奮然輿内ヲ突キ其
 應ミザルヲ見テ倏チ輿窓ヲ開クバ中將モ亦兩

陸州藩有村治
左門

江世事傳三編 卷之三

大角氏成坂

衣ヲ穿テ輿内ニ俯伏ス治左衛門乃チ其髻ヲ執
テ之ヲ輿外ニ出シ遂ニ其首領ヲ斬リ大音ニテ
非伊掃部頭ノ首ヲ獲タリト呼フ衛士之ヲ見テ
後ヨリ其腕ヲ撃テドモ治左衛門之ヲ意トセス
首級ヲ提ケテ日比谷ニ走リ遠藤但馬守邸前ニ
至リ屠腹ス或ハ云フ治左衛門獲ル所ノ首級ヲ
持シ去ル人其行ク所ヲ知ラズ後チ潜行シ大阪
ヲ經テ西歸ス吏之ヲ聞テ追隨西馳シ下ノ関ニ
至レドモ遂ニ獲ル能ハズニテ飯ル初治左衛門
水戸一寓シ烈公ニ知遇セラル治左衛門深ク之

福重藏

佐野竹之介

ノ感激スレバ茲ニ及フト云是日浪士ノ襲撃ス
ルニ當リ衛士等力ヲ盡シテ防撃スレドモ事不
意ニ出ルヲ以テ竟ニ中将ヲ救フト能ハズ聞死
スルモノ四人重傷ヲ負フモノ二十餘人而シテ
浪士楢田重藏ナルモノハ彦根藩ノ為ニ救ザル
餘ハ皆多少ノ創ヲ被リテ或ハ割腹シ或ハ身ヲ
脱シクルガ就中佐野竹之介齋藤監物蓮田市五
郎黒澤忠三郎七中脇坂氏郎ニ自訴シテ書ヲ出
ス而シテ竹之介傷甚シク右腕殆ト落シトスレ
ル意氣從容トシテ罪ヲ俟ツ人其膽力ニ愕カザ

竹之介一歌

ルナカリシガ夜ニ至テ竟ニ死ス此時人々詩歌
 ヲ懐ニス竹之介モ亦和歌ヲ懐ニス豪氣言外ニ
 溢レ最モ人口ニ膾炙シ世争テ之ヲ傳フ歌ニ曰
 シキシマノニシキノミハタモチサ、ゲキミガ
 イクサノサキガクヤセ山大関和七郎森五六郎
 森山繁之介杉山弥一郎等細川氏邸ニ至リ自首
 シテ曰我同志ノ輩去月國ヲ發セシヨリ處々ニ
 潜伏シテ幸ニ今日ノ好機會ヲ得タルハ今曉愛
 宕山ニ會シ竟ニ此舉ニ及ビシガ同志四人ノモ
 ノ辰ノ口ニ赴ケドモ我等地理不令明ナレバ貴

大関和七郎等
ノ自首

竹之介等訴

邸ニ至レリ請フ重職ノ人ニ謁セシメテ委細ヲ
 悉シテ訴書ヲ上ラント其旨大抵佐野齋藤氏等
 ノ服坂氏ニ投ヤシ書ト大同小異ナレハ今殊ニ
 佐野氏等ノ訴書ヲ舉ク其略ニ曰我輩中將非伊
 公ニ對シ毫モ私怨アルニアラズ畢竟萬民ノ塗
 炭ヲ救ハシガ為此舉ニ及バルナリ夫レ中將等
 太平ノ久ニ慣レテ媮安姑息シ蠻夷ノ恫喝ニ懼
 レテ口ヲ閉ケハ較チ時勢ノ變遷ヲ説キ遂ニ勅
 詔ヲ来セズシテ五弟ト條約ヲ結ヒ如君ヲ挾ミ
 私意ヲ以テ宥リニ京師ニ於テハ公卿百官閑束

ニテハ尾水越三家ヨリ諸有司ニ至ルマテ聊カ
 其意ニ悖ルモノアレバ皆之ヲ禁錮シ之ヲ死刑
 ニ處ス既ニ我老矣ノ如キ深ク當世ヲ憂ヒ首々
 ニ尊攘ノ説ヲ以テ屢幕府ヲ規諫スレドモ曾テ
 之ヲ顧ミヌ却テ異志ヲ懷クトナシ嚴譴ヲ加フ
 夫レ交易ハ皇國ノ大害ニシテ國家ノ衰弊ヲナ
 スヲ乳臭ノ稚子モ知ル處ナルニ一モ之ヲ慮ヘ
 ズ彼ノ賤キ銀貨ト我衣食金銀有用ノ品ト交易
 シ甚シキハ夷虜ニ都下ヲ徘徊スルヲ許シ國人
 ヲ視ルト土芥ノ如クナラシムルニ至ル加之幾

交易害ヲ論

彦根藩訴書

神人共ニ容レ

内及ヒ北國ノ開港近キニアラントスレバ國民
 安シニ手足ヲ措シヤ是ニ於テ我輩同志ヲ糾合
 レ不肖ヲ顧ミズ老疾ノ誠意ヲ繼キ天ニ代リテ
 國ヲ賣リ己ヲ利シ神人共ニ容レザルノ國賊ヲ
 誅セリ敢テ私意ヲ以テスルニ非ザレバ固ヨリ
 官ノ公裁ヲ俟ツハ僕輩ノ伏テ祈ル所ナリ而シ
 テ今其首惡ヲ除クト雖僕輩ノ死後ニ至リ速ニ
 此弊政ヲ改メザレバ皇國永ク外夷ノ奴僕トナ
 ラン官夫レ之ヲ憐察セヨ○四日彦根藩訴テ曰
 昨日ノ狼藉モノハ水戸鹿兒島二侯ノ藩士ナル

和七郎等

一已ニ判然タリ而シテ臣直弼モ重傷ヲ受クタ
 レバ家臣一同動搖セリ伏テ請フ右ノ藩士等捕
 ハル、モ、ノヲ賜ハラン、一ヲ閣老紀伊守等之ヲ
 諭シテ佗日公斷ノ期ヲ俟タシム○五日池田播
 磨守等評定所ニ於テ大関和七郎森五六郎杉山
 弥一即黒澤忠三郎ヲ訊問ス一同哂テ會テ曰前
 中納言屢上書シテ外事ヲ諫ムレドモ諸吏忌テ
 為ニ通ビス是ヲ以テ未ダ閉港絶信ノ舉アラザ
 レバ僕等悉ク外事ヲ主ルモノヲ誅ヒント志ス
 是レ獨リ前中納言ノ意ヲ奉ズルノミナラズ天

官田瀬兵

下ノ為ニ忠ヲ盡スナリ○九日薩摩ノ人水戸藩
 金千孫次郎佐藤太郎等ヲ伊勢四日市ニテ捕ヘ
 之ヲ幕府ニ出ス○十一日常州久慈郡ノ農官田
 瀬兵衛ナルモノ肥後彦邸ニ詣リ憤然ト自訴シ
 テ曰臣瀬兵衛ハ期ニ後レテ共ニ外櫻田ノ義舉
 ヲ起ス能ハズ遺憾山ノ如クアレドモ大関杉山
 等ト同志ノモノナレバ請フ同ク處置ヤシクテ
 官故ヲニ之ヲ狂人トナシ禁錮セシム
 野史氏曰古語ニ鐘腸ノ男子ハ共ニ事ヲ謀リ
 テ成ラズトモ共ニ其事ニ死ストアリ是實ニ

格言ナリ瀬兵衛ノ如キハ共ニ謀リテ共ニ事
 ヲ起ス能ハズトモ竟ニ其志ヲ變ヤズ斷然自
 首シテ嚴刑ヲ避クズ所謂鏡腸ノ男子ニアラ
 スシテ何ゾヤ而シテ瀬兵衛ハ僅ニ田間一
 農民ナリ農民ニシテ且然ラバ水戸藩士ノ男
 子腸ヲ有テルコト果テ如何
 十三日鹿兒島彦東下セシガ途中筑後ヨリ國ニ
 歸ル○十五日大將軍親ラ登城ノ諸侯ヲ諭シテ
 曰近來各國ノ商人陸續横濱ニ來リ人心未タ穩
 妥ナラザルニ今般櫻田ノ變アルハ實ニ容易ナ

將軍、説諭

高橋父子四又

ラザルノ時ナリ各一層府下ノ警備ヲ嚴ニセリ
 ○二十三日夜水戸藩高橋多一郎同庄左衛門河
 寄孫四郎大阪ニテ自裁ス是日山崎獵藏等三人
 モ捕ヘラル高橋父子ノ大阪ニ逃ルルヤ嶋男也
 ノ家ニ寓シ居ルト數日奉行久須義佐波守之ヲ
 聞テ急ニ男也ヲ召ス是ニ於テ高橋父子將ニ逃
 レシトテ門ヲ出シトス時ニ夜初更雨フルト盆
 ヲ覆ヌカ如ニシテ門外人ノ偵ヲモノアリ多一
 郎拳ヲ以テ之ヲ搏チ直チニ秋ノ坊ニ赴キ茶店
 ニテ草鞋及ヒ傘ヲ請フ少馬アリテ捕卒來リ尋

捕卒地

在左門ノ詩

テ曰浪士二人今コ、ニ来ラザルヤ多二郎對テ
 曰僕輩ニアラズヤ捕卒大ニ愕キ聲ヲ吞テ地ニ
 倒ル多一郎等遂ニ小河欣次兵衛ノ家ニ到リ請
 フテ曰僕輩ハ水戸藩ニテ櫻田義舉ノ同志ナル
 カ身ヲ薩州ニ潜メ佗日為メ所アラント欲スレ
 ドモ今不幸ニシテ事既ニ露レバ死シテ忠義ノ
 鬼イナリ皇宮ヲ護スルニ若カズ願フハ此遺金
 ヲ以テ石碑ヲ建ヨト金六十二圓ヲ出シテ父子
 從容劍一伏ス莊左衛門等テ詩ヲ賦ス慷慨悲壯
 以テ其人トナリヲ見ルニ足ル詩ニ曰吳錦織成

遺金六十二圓

坂本甲藏建
論

世路難憶君不耐淡潜々躊躇邸外月明夜偏照行
 人腸裏寒○晦日彦根侯大老ヲ免ゼラル是ヨリ
 先ニ彦根藩水戸浪士十七人ノ一人ヲ執ヘシガ
 其懐中ニ老疾ヨリ賜ハリシ親書且豫備金若干
 ヲ得タレバ櫻田ノ舉ハ水府老疾モ與謀アラシ
 ト流言セリ故ニ是日山形藩塩谷甲藏建言シテ
 曰今般彦根藩ニテ執ヘシ水戸浪士懐中ニ老疾
 ノ親書等アリシト傳播スルハ老疾ヲ怨ミシモ
 ノ、偽言ナルヲ明ケシ夫レ櫻田ノ一舉ハ水戸
 家ノ安危ニモ拘リシヲナレバ必死ヲ期セシ十

七人ノモノ何ゾ徒然ト之ヲ懐ニセシヤ且縱ニ之
 之アルトモ官吏ノ檢スルヲ俟タズシテ私ニ之
 ラ流言スルハ何ゾヤ若シ尚疑ヲ其際ニ容ルレ
 バハ代洲河岸ニ自裁セシ二人脇坂彦郎ニテ死
 セシモノ皆之ヲ懐ニセザルハ何ゾヤ而シテ十
 七人ノモノ狼藉ヲナスト雖其八人ハ從容ト聚
 ヲ俟ナテ同志ノ姓名ヲ訴ヘタルニ猶其餘黨ヲ
 索メバ却テ水戸全國ノ義士忠臣ヲ動搖セシム
 ルニ至ラン請フ之ヲ斟酌セヨ晉ノ陶侃ハ謝安
 が法外ノ意ヲ得タリト稱美セシモ法ニ泥リガ

陶侃ノ驛奇

ルヲ以テナリ殊ニ今般水戸脱藩ノ高橋多一郎
 父子林忠左衛門等數人皆忱慨憤激深ク國家ヲ
 憂ヘシモノナレバ方今ノ如キ外事を端ニ秋ニ
 方リ事アル必ズ拔羣勇戰スベシ實ニ惜ムベキ
 一器ナリ請フ寛大ニ之ヲ處セヨ又嚮ニ一橋刑
 部卿ノ英明且年長ナルヲ以テ宗家ニ納ント謀
 ル者モ皆當今累卵ノ勢ナルヲ憂フレハナリ誰
 カ公家ニ對シ異志ヲ懐クモノアラシヤ古語ニ
 モ窮鼠却テ猫ヲ咬ムトアレバ不義ノモノトテ
 只管之ヲ罰スレバ却テ禍乱ヲ生スルニ至ラン

窮鼠却テ猫ヲ咬ム

通事抄二編 卷之三

十

大角氏藏版

故ニ少シク之ヲ察セヨ且今般ノ變ニヨツテ當
 路ノ人ナド格外警備ヲ嚴ニスルハ笑フベキ
 甚シキナリ何ゾ人ヲ殺シテ其喉ヲ突キシニ尚
 脉絡緊要ノ處ヲ一々刺スモノナラシヤ且又井
 伊中將ノ朝廷ヲ輕蔑シ公卿大臣ヲ遇スル塵
 芥ノ如ク既ニ一昨年来天下有名ノ豪傑ヲ刑戮
 スル一五六十人ニ下ラザレバ人ノ之ヲ聞テ切
 齒扼腕セザルモノナシ水滸憤激モ蓋シ茲ニ
 胎胎スルナラレ人感ナレハ天ニ勝テ天定レハ
 人ニ勝ツトノ諺アレバ水滸浪士ノ此舉ハ天定

天定テ人ニ勝

改元ノ令

外國人ノ陰謀

テ人ニ勝ツモノナラン故ニ請フ當路ノ人心ヲ
 安ンジテ事ヲ執ラントラ○閏三月朔日詔シテ
 元ヲ改メ萬延ト云フ此日横濱ノ商人某老中脇
 坂侍從登城ノ途中ニ自訴シテ外國人ノ陰謀ヲ
 上言ス其略ニ曰外國人ノ言ニ云我等日本ニ乘
 リ強弱ヲ試ミシニ格外弱國ニシテ士民遊惰奢
 侈ニ耽ル甚シ故ニ我等方今ノ急務ハ日本士民
 ノ奢侈ヲ勸メ疲弊ヲ促スニ若クナシ然カシテ
 五七年ノ後ニ至リ難題ヲ設ケ若シ役ハザレバ
 直チニ軍艦數十艘ヲ率ヒテ之ヲ劫シ一舉ニシ

通世事二編 卷之三

十一 大角氏藏版

日本人多欲

テ我属國トナスヘシ而シテ日本人ノ性情都テ多欲ナレバ之ヲ棄カスヲ掌ヲ指ガスガ如シ支那人ハ稍欲少シト雖二十年ヲ出ズシテ服セシム況シテ多欲ナルモノヲヤ殊ニ日本ハ神國トテ人々神徳ヲ頼ミ奢侈ニ耽リ武備ニ情リ媿安姑息ニシテ戦争ヲ好マズ火術ナドノ迂濶ナル三歳ノ児ガ弄器ノ如シ何ゾ同シ天ヲ戴キナガラ斯ク愚昧ヲ極ムハヤ○六日幕府神奈川守衛ノ諸侯ニ令シテ曰浮浪ノ徒横濱ニ侵入スルヲ計リガタケレバ一層警備ヲ嚴ニセヨ○二十日

米國ニ使節歸ル

葡人ト條約ヲ結ブ

幕府軍艦ニテ横濱海上ヲ守衛スヘキ旨ヲ令ス○四月七日彦根侯喪ヲ發ス○二十八日彦根侯世子愛管遺領ヲ賜ハル○五月四日英公使平侯邸ニテ御殿山ノ旅館并ニ品川ニ商館ヲ建ル等ノ事ヲ議ス○六日軍艦奉行木村振津守同教授頭取勝麟太郎等米國ヨリ歸ル○十五日木村勝等大將軍ニ謁ス米國ヨリ歸ルヲ以テナリ○二十四日葡船一艘品川ニ來ル○六月十八日葡人平侯邸ニテ條約ヲ結フ此日朝廷陪衛大隅守太久保忠良ニ命シテ接夷等重大事件ノ詔書ヲ

皇子祐宮儲君

京師守衛

齋ヲ新江府ニ至リテ之ヲ傳ハシム○七月四日
 米公使登城シ拜禮ヲナス去年ノ式ヲ改ムナリ
 ○九日英公使モ亦登城シテ拜禮ヲナス○十日
 皇子祐宮ヲ以テ儲君トナス○十一日幕府高松
 彦根郡山松江桑名五侯ニ京師ヲ守衛スベキ旨
 ヲ命シ并ニ淀高槻膳所篠山四侯ニ山崎楊谷塚
 原宇治等ノ要地ヲ戍ラシム○十八日幕府天下
 ニ令シ軍艦操練所ニ於テ航海術測量算造船術
 蒸氣及ヒ帆前船ノ器械運用ヲ研究スルヲ許
 ス○二十日宇船品川ニ來ル○二十一日佛人登

其人富士山ニ

水戸藩紀略

城シ拜禮ヲナス○二十五日英公使等二十餘人
 駿河ニ至リ富士山ニ登ル幕府ノ吏卒百餘人之
 ニ從テ其上ルヤ中阪ニシテ暴風ニ遇ヒ行ク
 能ハズシテ山ヲ下リ海邊ニ抵リテ富士ノ高サ
 ヲ量ル凡四十二町遂ニ伊豆ノ温泉ニ浴シ下港
 ヲリ歸ル是時人穴モ亦測量ス深サ一十八百尺
 ト云○二十九日宮女姉小路京師ニ行ク和宮降
 嫁ノ事ヲ以テナリ○八月三日幕府琉球人來聘
 ノ事追テ達スベキ旨ヲ鹿兒嶋侯ニ命ス○十五
 日水戸前中納言源齊昭薨ス烈公ト謚ス年六十

攝奉氏強和官ノ降嫁ヲ請フ

餘齊昭英明特達學古今ヲ究メ韜略ヲ嗜ム天保ノ末田獵ニ托シ始テ治軍ニ悉ク佛寺ヲ廢シ僧徒ヲシテ農タラシメ多ク法鐘ヲ毀テ以テ煩ヲ鑄ル幕府其異志ヲ懷クヲ疑ヒ命シテ致仕セシム米船ノ來ルニ及ヒ幕府其多武ナルヲ以テ再々舉テ政事ヲ參與ス鐘鐺ノ詔ハ實ニ齊昭ノ請ヲ所ナレドモ公首メニ攘夷ヲ唱フレバ議論毎ニ老中ト齟齬シ復タ事ニ坐シ軟々トシテ世ヲ終フ○十八日大將軍ノ使婢勝光院攝本氏京師ニ入リテ皇妹和官ヲ尚セント奏請ス是ヨリ先

和官ヲ為スル幕意

水滸藩兵一旅

一和官有栖川王府ニ通クヲ命ゼラル故ニ敢テ辞ス朝議モ亦之ヲ拒ム然レドモ攝本氏固ク請フテ止マズ而シテ幕府初先將軍ニ鹿兒島侯ニ養女ヲ娶リ以テ大藩ノ歸從スルヲ天下ニ示シ且外戚ノ羽翼トナセシガ先將軍發世ス是ニ至リテ幕議皇妹ヲ將軍ニ配セントスルモ公武ノ一致スルヲ欲テナリ○二十二日幕府去井能登守ニ北蝦夷ノ地ヲ割キ賜フテ開拓セシム○二十七日水戸藩士三十七人鹿兒嶋侯邸ニ至リ意見ヲ陳シテ書ヲ出ス其略ニ曰方今神州ノ形

勢ハ實ニ累卵ヨリモ危シ而シテ幕吏外夷ノ勢
 焰ニ恐怖シ媮安姑息ノ為横濱ヲ開港セシヨリ
 以来人情洶々日トシテ騷然ナラザルナク其間
 ハ愚民ヲ欺キ私欲ヲ逞フシ頻ニ要用ノ物品ヲ
 交易シ漸次彼ノ術中ニ陥リ他日ノ害測ルベカ
 ラズ是ヲ以テ朝廷機勇ノ詔ヲ下セシニ要路ノ
 有司一モ之ヲ奉ムルモノナシ此時ニ當リ誰カ
 能ク萬民ノ塗炭ヲ救ハンヤ我前中納言ハ拙陋
 ヲ顧ミズ敢テ其任ニ當ラント欲スレドモ今已
 ニ鬼録ニ上レリ然ラバ則満天下ノ士民領ヲ引

大垣侯賞

皇太子立

テ其人ヲ望ム七ノハ薩州侯閣下ニシラズシテ
 誰ゾヤ故ニ請フ臣等同心協力シ以テ閣下ノ先
 鋒トナリ夷虜ヲ鏖セシノ薩藩之ヲ撫シテ邸
 内ニ寄食ヒシム○是月英佛ノ兵支那ノ北京ヲ
 陥ル○九月四日幕府一橋州部卿ノ慎ヲ宥ス○
 十五日鍋島老侯高智老侯木卿丹後守石川出佐
 守等モ亦慎ヲ赦リル○十六日幕府大垣侯ニ鞍
 鐙時服ヲ賜フ國政ノ修マルヲ以テナリ○二十
 日幕府水戸侯ニ勅諭ヲ納ムニ及バザル旨ヲ命
 ス○二十八日祐宮儲君諱ヲ睦仁ヲ以テ親王ト

正史

卷之三

十五

本朝の歴史

ナス○十一月朔日幕府天下ニ和官大將軍ニ降
 嫁スルノ旨ヲ令ス是ヨリ先ニ朝廷幕府ノ和官
 ヲ尚セシト請フ一再三ナルヲ以テ昔子内親王
 東下ノ例ニ依リ之ヲ許スト云○五日幕府對馬
 守安藤信正ニ爾來外國ノ事務一人ニ任スル旨
 ヲ命ス是日箱館奉行織部正堀利熙安藤信正ヲ
 切諫ス初是歲ノ秋外夷府下ノ御殿山ヲ借ラレ
 ト請ヒケルガ信正將ニ之ヲ許サント欲ス是ニ
 於テ利熙其不可數條ヲ舉テ諫止スレドモ聽カ
 らズ且信正ノ不軌ヲ謀ル等ノ流言アレバ遂ニ上

安藤信正一人
 ニテ外國ノ事
 ヲ司ル

攝政正ノ上

書シテ自裁ス其略ニ曰嚮ニ微軀ヲ顧ミズ激論
 妄答閣下ノ高議ニ服ヒズ且罪萬死ニ當ル今復
 タ芥鐵ノ誅ヲ避ケズ肝腦ヲ碎キ腸血ヲ絞リ聊
 カ鄙言ヲ述ヘ以テ閣下ニ奉ス抑外虜航海以來
 公議百方戰ニ決セズシテ和親ニ決ス是時ヤ誰
 カ切齒扼腕セガラシヤ而シテ閣下恣意忘行天
 下ノ公論ヲ顧ミズ既ニ大義ヲ犯スモノ勝テ算
 フベカラズ就中米公使ヲシテ貴邸ニ召ヒ專ラ
 我政務ヲ議シ閣下之ト被ヲ共ニシ餐ヲ同フシ
 遂ニ我國典數部ヲ與フ是レ怪ムベキ一ツナリ

近世事情三編 卷之三

十六 一方月日續形

彼閣下ト兄弟ノ義ヲ結ヒ種帛奇玩數千ヲ贈
 閣下之ニ酬フニ慶長正保金若干ヲ以テス是レ
 怪ムベキニツナリ彼醉倒ノ際閣下ノ侍婢ニ戯
 而シテ閣下之ヲ與フ是レ怪ムベキニツナリ
 彼居館ヲ御殿山ニ築カント請フ閣下之ヲ許ス
 是レ怪ムベキ四ナリ此四事既ニ大義ヲ犯スモ
 最モ甚シ然モ尚此ヨリ甚シキモアリ竊ニ
 聞ク彼妄ニ天子ヲ廢スルヲ議ス閣下之ヲ承
 諾シ國學者ヲシテ舊典ヲ探ラシメ私カニ其事
 ヲ議スト是ニ至リテ僕ガ血淚雨ノ如ク鉄腸裂

大義ヲ犯ス
ケ條

閣下ノ内ニ食
ハント欲ス

ケント欲ス天下ノ人モ亦皆慟哭憤怨シ閣下ノ
 内ヲ食ハント欲ス實ニ大逆無道天誅固ヨリ容
 レザル所ナリ其顛末已ニ彦根大老ニ於テ鑑メ
 ヘシ是レ僕ガ閣下ノ為ニ深ク憂ヒテ其高議ニ
 服セザル所以ナリ請フ少ク之ヲ容レヨ利熟ハ
 伊豆守利堅ノ子ニシテ幕府麾下ノ士ナリ頗ル
 博學多才ナルガ安政甲寅ノ歲蒞館奉行ニ拔擢
 セラレ尋ヒテ外國奉行ヲ授ス是ヨリ先ニ安藤
 信正ト屢時勢ヲ論シ言極メテ剴切ナレバ信正
 言ノ所ヲ知ラザルニ至ル是日モ亦之ヲ論シテ

近世事情三編 卷之三

水滸傳

家ニ歸リ更ニ此書ヲ作り自裁ス○九月大將軍
 本城ニ移ルコト安政六年十月本丸災アリ大將
 軍之ヲ西丸ニ避ケルガ是ニ至テ本丸落成スル
 ヲ以テナリ○十三日寺人對馬侯邸ニテ條約ノ
 事ヲ議ス○十九日幕府酒井若狹守ヲ京師ニ遣
 リ公卿一同ニ金一萬五千圓ヲ贈ル蓋シ和官降
 嫁ノ事ヲ以テナラン○二十一日幕府福山西尾
 尼青新庄龜山郡山六侯ニ命シ各國公使館ヲ守
 衛セシム時ニ浮浪ノ徒外國人ヲ襲フノ説巷街
 ニ滿ツレバナリ○二十九日脇坂中務大輔老中

大將軍本城ニ移ル

ヒウスケン新

ヲ免ゼラル○晦日箱館ニテ製造セシ龜田九成
 ル○十二月五日米公使ノ書記官ヒウスケン新
 ルモノ日暮馬上ニテ赤羽根相遇所ヨリノ歸途
 三田古川側ニテ要殺セラレ何人ノナス所ヲ知
 ラス○六日英佛ノ人江戸ヨリ横濱ニ行クヒツ
 スケンノ事ヲ議マンガ為ナリ○十一日米公使
 對馬侯邸ニテ去ル五日ノ事ヲ議ス○二十八日
 龜山侯老中トナル○晦日新庄駿河守幕府ニ訴
 テ曰嚮ニ水戸浪士等常總ノ間ニ蜂起セシガ頃
 者ニ至リ人數益増加シテ臣カ管轄ノ地方ニ

水戸浪士等

朝廷窮民之狀

到り攘夷ノ軍獲ト稱シ農商ニ逼リ金ヲ奪フ兀
 水戸浪士ノミナラス郷士農兵山伏等無類ノ徒
 が烏合セムナレドモ之ヲ捕フルヤ若シ賊勢熾
 ナル時ハ炮ヲ以テ威服セシムルトモ可ナルヤ○
 是月朝廷物價日ニ貴ク庶民困疲スト聞キ内帑
 ノ黄金五十枚ヲ發シ山城ノ窮民ニ賑フ其詔ノ
 略ニ曰民ハ國ノ本ナリ下民困窮セハ罪朕カ躬
 ニアリ近頃和官ヲ閑東ニ嫁スルモ天下ヲ安シ
 ゼンガ為ナリ今珠ニ金ヲ發シ窮民ニ分與ス若
 シ夫レ周カラザル幕府補助セヨ○文久元年正

文久元年

常陸、豊後

月四日朝廷字國ノ條約伺ヒナトヲ以テ幕府ヲ
 責ム○二十一日幕府府下每町自身番所ニ幟ヲ
 建ツベキ旨ヲ令スコレ外國人通行ノ時目標ト
 ナサン為ニ之ヲ請フ○二十二日津田英二郎幕
 府ニ懇テ曰水戸浪士及ヒ東西不逞ノ徒數十人
 臣カ領地下總國香取郡佐原村ニ至リ攘夷ノ期
 近キニアレバ軍備ヲナサント處々ニ狼藉シ農
 商ヲ劫シ金ヲ出サシム請フ士卒ヲ發シ之ヲ捕
 縛セシムラフ○二十四日津田英二郎再ヒ浮浪ノ
 徒日ニ蔓延シ益乱効ヲナス甚シキ旨ヲ訴ラフ○

二十九日幕府開東ハ州ノ諸侯ニ浮浪ノ徒ヲ捕
 ンベキ旨ヲ命ス○二月三日英人對馬侯邸ニテ
 公使ノ居場及ヒ兵庫對馬ノ開港ヲ議ス是日魯
 人對馬淺海浦ニ來リ其船ヲ修理セント上陸ス
 ○六日幕府水戸權中納言ノ家臣多ク脱藩シ長
 岡驛ニ蜂起セシテ自ラ士卒ヲ發シ之ヲ捕ント
 請ヒケルヲ許シ伊勢守堀田某筑前守岡部長寛
 ノ屬セシム又左京亮坂直實ニ命シテ北國口ヨ
 リ入り之ヲ捕ヘシメ式部大輔柳原政恒ヲ屬セ
 シム堀田鶴之丞ヲ水戸路戸田忠恕ヲ日光路ニ

幕府大、浪上
ヲ捕フ

水戸浪士、宣

備ヘシム且小普請三百人ヲ横濱ニ遣リ益外國
 人旅館ヲ衛ヲシム時ニ麻布ノ善福寺高輪ノ東
 禪寺三田ノ濟海寺モ亦各國公使ノ旅館トナレ
 諸侯ニ命ジテ之ヲ衛ル益嚴ナラシム是ヨリ
 先ニ水戸藩士凡二百餘人脱出シテ常刑ノ長岡
 驛ニ據リ宣言ス故黃門ノ遺志ヲ奉ジテ弟狄ヲ
 掃攘セント乃チ榜シテ曰金四圓ヲ獻スルモノ
 ハ軍ニ從フヲ許シ劍銃ヲ給セント又豪農富商
 ニ諭シ金穀ヲ出サシメテ曰事成ラバ倍償セン
 貸サハレバ首ヲ刎レ敷日ニシテ軍糧堆積ス諸

大角氏藩邸
卷之三

藩ノ亡臣惡少年等競ニ集ルモノ千八百人皆之
上野下總ノ要地四所ニ起シ毎夜燦ヲ張テ人民
ヲ煽動シ又檢ヲ移ス其略ニ曰故黃門ノ志ヲ繼
テ義兵ヲ舉ケ一將ハ海軍ヲ率ヒ横濱ヲ突キ夷
館ヲ燒テ之ヲ廢セシ一將ハ陸軍ヲ率ヒ江戸ニ
入リテ悉ク外國事務ヲ管スル吏ヲ誅シ以テ天
下ノ民ヲ救ヒ皇國ノ威ヲ耀サン○九日魯船品
川ニ来ル此日幕吏江戸ニテ水戸藩岡部三十郎
ヲ捕ヘ堺ニテ同藩住谷悌之介中島金平ヲ捕フ
○二十三日米公使登城シ新年ヲ賀ス此日幕府

文久改元

赤城山

江戸町奉行勘定奉行加奈川奉行等ニ命ニテ嚴
ニ長岡驛等ノ黨ニ備ヘ其四出ヲ禁テ之ヲ捕ヘ
シ○二十八日文久改元ノ令アリ○二十九日
幕府近頃物價騰貴スレテ以テ麾下ノ士ニ金ヲ
貸ス是月常總蜂起ノ徒日ニ蔓延セルガ又上野
赤城山ニモ數百人屯集スト云○三月四日魯人
對馬益々浦ニ来リ家ヲ建ツ○十五日幕府和官
東下延期ノ旨且異状ノ被リ物ヲ禁スル旨ヲ令
ス○二十二日幕府對馬侯ノ外國事務ヲ精勤セ
ルヲ以テ一萬石ヲ加増ス○二十三日大將軍本

近頃物價騰貴
卷之三
二十一
大角氏藩邸

城ニ移ル、祝トシテ能狂言ヲナシ、是日破戒、
僧尼及、私ニ淫賣スル婦人等ヲ蝦夷ニ移ス、
二十四日幕府勘定奉行竹内下野守外國奉行桑
山左衛門尉目付京極兵庫勘定吟味役高橋平作
ニ英佛各國、使節ヲ命ズ、○二十六日幕府天下
ニ令シテ曰文武ノ教育ハ實ニ方今國家ノ急務
ナレガ近來ハ殊ニ講武所軍艦操練所蕃書調所
ノ設ケ益文武隆盛ノ運ニ進マントマ、苟モ皇國
ニ生ル、モ、ハ此時ニ當リ興起奮勵セザルハ
ケンヤ然モ文學ハ文弱ニ流レズ武術ハ粗暴ニ

大角氏補注
本頁以補注

興起奮勵

陷ラズ唯一途ノ忠誠ヲ以テ幕意ヲ體認セシ、
二十七日又諸事舊弊ヲ改革シテ無益ノ費ヲ省
略セシ、トテ令ハ是日山形藩塩谷甲藏岩村藩若
山壯吉等文學談博ナルヲ以テ大將軍ニ謁ス、
四月八日幕府去非能登守ニ北城夷開拓スル
費用夥シキヲ以テ金三千圓ヲ賜フ、○十二日宗
對馬守幕府ニ訴テ曰嚮ニ魯人上陸シ其船ヲ修
理セシガ所在徘徊シテ乱妨シ既ニ大船越ニテ
農民安五郎ナルモノヲ銃殺セリ請フ之ヲ退帆
セシメン、トテ○二十九日皇妹和宮ヲ以テ内親

魯人對馬、依
籍ス

内親王

二十三

大角氏補注

上トナス是日水戸侯其領内ニ屯集スル浪士ヲ
 捕ヘテ旨ヲ幕府ニ上言ス○二十三日宗對馬守
 又魯人ノ亡状益甚シキ旨ヲ訴フ是月江戸大阪
 兵庫新瀉開港延期ノ事ヲ以テ魯英佛等ノ各國
 ニ大將軍ノ手書ヲ贈ル○五月二日英人ノ一
 コツク兵庫ニ來リ東海道ヲ陸行シ江戸ニ至ル
 ○七日夜東山修學院内ノ大松樹故ナクシテ倒
 ル初内親王修學院ヲ遊觀セシトスレドモ此異
 事ヲ以テ期ヲ延スト云○十五日英公使對州侯
 邸ニテ日本海測量ノ事ヲ議ス○十六日蘭人シ

東山ノ松樹倒

近世事情

林崎

彗星北斗ニ見

東禪寺ノ變

一ポルト江戸ニ來リ赤羽根ニ寓シテ雇作ヲナ
 ス○十九日幕府水野筑後守ニ外國使節ヲ命ス
 ○二十四日勅シテ累帝ノ神主ヲ靈明殿ニ移ス
 此殿新ニ落成スルヲ以テナリ是昏彗星北斗ノ
 西北ニ見ル大サ三寸光芒廣サ三尺長サ三丈餘
 ○二十八日夜半水戸浪士有賀重信岡見富次郎
 前木新八郎森半藏神越三郎等十四人槍ヲ持シ
 テ英公使ノ旅館高輪東禪寺ニ突入シ英人二名
 ヲ傷ツケテ進ム館ヲ衛ル幕吏郡山西尾ノ士卒
 等驚キ起テ之ヲ禦ク浪士健闘シテ衛士十餘人

近世事情 卷之三

二十三 七月廿七日

神威三郎等ノ
被害

殺傷ス重信等二人之ニ死シ銀三郎等三人拘ヘ
ラル餘ハ奥羽ニ逃走ス浪士皆一書ヲ懐ニス曰
僕輩ハ不肖ナリ然レモ神州ノ夷狄ノ為ニ卑汚
セラルヲ坐視スルニ忍ビズ乃チ心ヲ尊王攘夷
ノ大義ニ決ス然モ僕輩能ク國威ヲ海外ニ耀
シテ故ニ微忠寸武ヲ顯シテ以テ攘夷ノ緒ヲ起
シ聊カ國恩ニ報ゼントス是ニ由テ遂ニ聖襟忘
慮ヲ安ンゼバ榮此ヨリ過ルモノナシ○二十九
日勅シテ彗星ノ帝星ニ迫ルヲ以テ七廟ノ祝人
七大寺主ニ之ヲ禱ラハシム○六月米蘭公使對

幕府

幕府

馬侯邸ニ詣リ東禪寺ノ事ヲ大ニ怒リ兵ヲ用ヒ
逼ラントス對馬侯方之ヲ諭シテ事裁カニ平
ク○十六日幕府東禪寺へ侵入セシ殘黨ヲ捕
ベキ旨ヲ令ス○十七日幕府水戸侯ニ命シ其領
内ヲ嚴ニ制セシム○十九日幕府天下ニ令シテ
曰爾來商民タリトモ蒸氣及ヒ帆前船ヲ買フ
ヲ許セリ若シ杭海熱練ノ船將水夫ナキモノハ
官ヨリ之ヲ貸サン○二十日幕府名古屋侯和歌
山侯ヲ登城セシメテ水戸ノ事ヲ議ス○二十四
日幕府戸澤上總介松平越中守松平隱岐守ニ命

幕府

二十四

幕府

始日本海
測量

神奈川ノ外國旅館ヲ守衛セシム是月萩藩永
井雅樂京師ニ至リ開國論ヲ奏ス○七月二日英
幕府ニ請フテ曰加奈川ヨリ長崎箱館ニ至ル
ノ海路各暗礁多クシテ運船毎ニ之カ為メ破損
セラル請フ之ヲ測量セシム幕府遂ニ之ヲ許
シ其沿海ノ諸藩ヲシテ糧食ヲ給セシメ外國奉
行ノ屬吏ヲシテ英人ト共ニ測量シ之ヲ圖セシ
ム後テ測量冊成ルニ及テ諸藩ニ頒ツ○九日米
公使對馬侯邸ニテ館地等ノ事ヲ議ス○十一日
幕府松平出雲守鳥居越前守等ニ命シテ品川御

御殿山・旅館
ノ築シ

櫻田ノ浪ミヲ
刑ニ處ス

殿山ニ各國旅館ヲ建テシム○十六日各國公使
橫濱ニ行テ御殿山旅館ノ落成ヲ待ツ○二十日
幕府野々山丹後守小笠原振津守等ヲ對馬ニ遣
リ魯人ヲ諭セシム○二十六日幕府水戸藩金子
孫次郎大関和七郎森五六郎岡部三十郎蓮田市
五郎森山繁之介杉山弥一郎ヲ死刑ニ處ス彦根
侯ヲ擊ツヲ以テナリ此餘ハ既ニ死セリ○八月
七日幕府來ル十月和官京師ヲ發興ス古者ヲ令
ス○八日英公使東禪寺ヲ守衛セシ松平時之介
等數人ニ物品ヲ贈リ五月ノ事ヲ謝ス○十一日

近世書目

卷之三

二十五

大角氏藩邸

284662

英公使怒

松平肥前守大砲三門ヲ幕府ニ献ス○十二日朝
廷幕府ニ勅シテ英國測量船ヲ伊勢志摩ニ来ラ
ゲラシム○十四日英公使對馬侯邸ニ詣リテ對
馬ヲ魯人一假シタルヲ怒ル是ヨリ先ニ魯人
對馬ニ来リ強テ館地ヲ假ラニテ請テ煩ヲ發
シテ迫ル國守宗義和力ヲ盡シテ防戦ス互ニ勝
敗アリケルガ遂ニ魯艦ヲ却ク是ニ至テ之ヲ假
ス○二十一日水戸浪士數十人常州大津ニ屯集
シ松ヲ裝々奥州ニ至ラント唱ヘルガ或ハ横濱
ヲ襲ハントスルノ風説アレバ幕府外國奉行ニ

浪士之南

和宮東下ノ首途

横濱ノ守衛ヲ嚴ニセシム是日水野筑後守桑山
左衛門尉ノ外國使節ヲ止メ更ニ松平石見守ニ
之ヲ命ヌ○二十四日東禪寺守衛ノ諸侯ヨリ番
卒ニ至ルマテ褒賞ヲ賜ハル○二十五日對馬藩
留ノ魯人去ル是月水戸侯其領内ニテ浪士ヲ捕
フルヲ嚴ナリ○十月三日和宮内親王牛車ニ乘
リテ祇園祠ニ詣リ以テ東下ノ首途ヲナス權大
納言藤原忠能等數十人之ニ從フ○幕府福井侯
ノ神奈川横濱守衛ヲ止メ品川ニ及ヒ六ノ砲臺
ヲ守ラシメ姫路侯松代侯ニ右砲臺ノ守衛ヲ止

神奈川横濱ヲ守ラシム○十三日萩侯江戸ニ
 至リ天下ノ為、幕府ニ建言シテ曰夫レ外國ト
 條約ノ事成ルヨリ既世憂國ノ士ハ外夷ノ跋扈
 ヲ憤リ幕府ノ因循ヲ誅リ妄ニ憤言激行ヲナシ
 亥商貧賈ノ徒ハ私欲ヲ逞フシ頻ニ開國ノ説ヲ
 主張ス斯ノ如クニシテ天下ノ議論兩端ニ分レ
 國內ニ於テ既ニ土崩瓦解ノ勢ニ至ル豈ニ懼レ
 ガルミヤケンヤ然レド臣竊ニ以為開鎖ノ論ハ枝
 葉ニシテ治國ノ大基本ニアラズ幕府モ亦何ハ
 國基ヲ立テズシテ枝葉ノ論ニ拘泥スルヤ國基

治國ノ大基本

立タザレハ鎖ルモ真ノ鎖ルニアラズ開クモ真
 ノ開クニアラズ而シテ臣カ論スル所ノ國基ハ
 名義ヲ明ニスルニ若カス名義ヲ明ニスルハ朝
 廷ヲ遵奉スルニ若ハナシ是ヲ以テ幕府急ニ朝
 廷ヲ崇奉セバ物論ノ鎮定スルノミナラス天下
 ノ士民嚮フ所ヲ知ラン然ル後開クベキハ開キ
 鎖グベキハ鎖グ何ゾ思フ焦スニ足ランヤ且外
 夷ハ航海ニ長シ銃法ヲ能クス是レ亦學ニ以テ
 心胆ヲ練リ知識ヲ開クニ足ル何ゾ舊習ニ泥リ
 時勢ノ變スルヲ辨ズシテ守株膠柱ノ愚見ヲ

懐クベケンヤ故ニ幕府速カニ京師ヲ遵奉シ公
 武合和ノ儼然タル國体ヲ天下ニ示シ億兆ノ士
 民一團一致ノ正氣ヲ振ルハ々五大洲各國ト對
 峙スベキモ亦期スヘシ

野史氏曰毅侯ノ此議論極メテ正確尤事情ニ
 切ニシテ滿腹ノ忱慨人ヲシテ一讀肅然ナラ
 シメ真ニ一世ヲ壓倒スルニ足ル若斯人ヲシ
 テ其任ニ當ラシムレバ中興ノ功業豈ニ期ス
 ベカラザランヤ

十六日英公使對馬侯部ニ詣リ應接ス此時公使

和宮江戸ニ至

茶禿長澤

警衛ノモノヲシテ槍ノ鞘ヲ脱セシメ自ラ衛ル

○二十日和宮京師ヲ發興ス其母親行院典侍局
 庭田氏等藤原忠能以下ノ公卿數人ト之ニ從フ

○十一月五日米公使登城シテ大阪港等ノ延期
 フ承諾スル返書ヲ出ス○十五日和宮江戸ニ至

リ清水氏ノ邸ニ館ス時ニ茶禿長澤蒼翠幕府ニ
 上書シテ曰方今ノ諸吏ヲ黜ケテ正義ノ人ヲ舉

ケ一橋公ヲシテ幕府ヲ佐ク越中前中將ヲ大老
 トナマヨ曰君公毎ニ公堂ニ臨テ諸政ヲ聽キ其

大事ヲ京師ニ議シ因テ現今関白九條公ヲ罷メ

一條二條近衛公ヲ選テ之ニ代ヘヨ曰横濱箱館
 ヲ閉港シ舊例ニ依リ長寄種島ヲ開港シ長寄ハ
 黒田鍋島兩氏ニ委シ種島ハ島津氏ニ委セヨ曰
 君公已ニ内親王ヲ尚ス因テ上洛シ奸佞ノ朝紳
 ヲ除却シ公武ヲ合同セラレハ天下ノ太平期ス
 ヘシ請フ速カニ上洛ノ禮ヲ行ヒ尊王ノ道ヲ修
 シトヲ○二十一日大將軍勅使廣橋一位坊城中
 納言ヲ拜ス是レ和宮降嫁ノ為ナリ○二十五日
 大將軍本城ニテ勅使ヲ饗ス○二十六日英公使
 對馬侯耶ニテ兵庫開港ノ事ヲ論ス是月鹿兒島

和使

和宮入城ス

天久二年

春日社、神鏡
裂ク

疾ヨリ兵ヲ發シテ京師ヲ守衛セシト密カニ奏
 ス○十二月三日幕府水野筑後守服部歸一ヲシ
 テ小笠原嶋ヲ巡視セシム○七日鹿兒島侯上郎
 燒亡ス蓋シ故アリト云○十一日和宮觀行院庭
 田氏ト皆牛車ニ乘リ入城ス○二十二日幕府竹
 内下野守等ヲ使節トシテ英船ニ附乘シ洋行セ
 シム○二年正月元日大和春日社前、神鏡故ナ
 クシテ三ツニ破裂ス時ニ天下兵乱、凶兆ナラ
 シト巷説紛々タリ○十四日幕府宇都宮藩共橋
 順藏等ヲ獄ニ下ス一橋公ニ事ヲ舉ルヲ勸ハレ

三九

大角氏

坂下變

八月十五日下野人甲田頭三等六人關老對
 馬守安藤侍從、登城セントスルヲ坂下門外ニ
 要撃ス侍從、蒙リ塵ニ遁ル初頭三等銃ヲ放
 テ劍ヲ拔キ侍從ノ獲興ヲ侵セルヤ侍從殆ト危
 フカリシガ衛士死カヲ竭シテ防撃スレバ侍從
 疵ヲ肩ニ負ヒナガラ獲興ヲ下リ直チニ坂下門
 ニ逃レ番所ニ息ヲ浪士一人之ヲ追フモノアリ
 將ニ及バントシテ衛士ノ為ニ殺サル此餘五人
 皆鬪死ス衛士モ亦十五六人傷ツケラル此時安
 藤氏別ニ家臣五十餘人ヲ遊兵ト称シ白刃ヲ廻

白刃

ハシテ坂下門外ヲ縱横ニ奔走シ浪士ノ殘黨ヲ
 索メシハルガ白刃ヲ朝日ニ耀テ親ク戰場
 ヲ觀ルガ如シ而シテ此舉ヲ起セシモノハ故外
 國奉行堀利熙ノ臣甲田頭三兒島強介小山田吉
 水戸人黒沢五郎越後人河本壯太郎等六人ニシ
 テ各書ヲ懷ニセルガ本名ヲ詭ハレルト云是ヨ
 リ先ニ安藤侍從英佛公使ニ御殿山ヲ假サント
 議スレハ堀利熙之ヲ拒ミ面折激論シ遂ニ書ヲ
 侍從ニ與ヘ其五大罪ヲ責メテ自殺スレドモ侍
 從之ヲ意トセザレバ頭三等利熙ノ意ヲ承ク國

坂下浪士ノ懷

耶蘇教ノ人ヲ捕フ

賊ヲ誅セントテ此舉ニ及フ懷書ノ略ニ曰安藤
信正ハ故井伊大老ノ義士ニ誅セラルヲ願ニス
朝廷ヲ蔑如シ夷狄ヲ親昵スルヲ却テ其上ニ出
テ、妄ニ天子ヲ廢スル等ノ事ヲ議ス何ゾ大義
ヲ犯ス一甚シキ茲ニ至ルヤ且夫レ皇妹ヲ東下
セシムルモ公武合体ノ為メト稱スレド是レ亦
信正ノ奸計邪謀ニシテ畢竟京師ヲ要シ開國ノ
勅詔ヲ得ント欲セルナリ斯ノ如キ國賊一日モ
共ニ天ヲ戴クベカラズ故ニ茲ニ及ベリ○二十
日幕府横濱ノ佛人禮拜堂ニテ邪蘊教ノ説教ヲ

三十一

三十一

長州藩ノ應接

聽クモノ三十二人ヲ捕フ○二月五日萩侯登城
シ老中久世大和守ニ忠告シテ曰僕既ニ屢建言
セシ如キ方今ノ形勢ニ方リ千古ノ英断ヲ以テ
之ヲ處セザルベカラザルニ故井伊元老ハ幕威
ヲ挾ミ私意ヲ以テ暴政ヲ布ケルガ今又安藤侍
從之ヲ殺テ私意ヲ擅ニスルヲ却テ井伊君ヨリ
モ甚シケレバ天下ノ人皆幕府ニ離叛セザルモ
ノナシ既ニ鍋嶋君等隱退ヲ請ヘルモ幕府ノ輔
クベカラザルヲ以テ專ラ自國ヲ富强ニシ他日
為ス所アラントス豈ニ幕府ノ為ニ懼レザルベ

三十一

三十一

ケンヤ而シテ近頃和宮ノ降嫁アレハ將軍ノ連
 ニ上洛アルベキニ今ニ至ルヤテ曾テ其議アラ
 ザルハ何ゾ朝廷ヲ輕蔑シ朝紳ヲ欺クノ甚キ此
 ニ至ルヤ是故ニ主上逆鱗シ朝紳憤激セハ幕府
 豈一手ヲ束スベケンヤ斯ノ如ク上ハ京師ノ憤
 怒下ハ士民ノ背叛スルニ至テ明決英斷一日モ
 後レベカラズ大和守愕然トシテ曰然ラバ之ヲ
 為ス如何萩侯黙シテ答ヘバ大和守ヲ疾視スル
 一稍欠シケレバ大和守頻ニ之ヲ促ス萩侯是ニ
 至リ答テ曰愚論ヲ聞カントスレトス急ナル

ハ定メテ採用アランカ夫レ今日ノ急務ハ一稿
 刑部卿ニ幕府ヲ輔佐セシメ越前守ヲ大老トナ
 スニ若クハナシ是レ此二君ハ人望ノ属スル所
 ニシテ才徳充備ノ英雄ナレバナリ且此餘川路
 佐々木ノ如キ慷慨義烈ノ士ヲ擢用シ右運ニ復
 シ弊政ヲ除クノ外佗ナシト辟氣奮然述ベケレ
 バ大和守答フル所ヲ知ラズ唯々トシテ曰貴説
 明瞭一トシテ當ラザルナレ請フ今ヨリ盡力ニ
 シ竟ニ同僚内藤紀伊守等ヲ召ヒ萩侯ノ言ヲ告
 グレバ一坐悚然誰モ答ルモノナシ萩侯大ニ憤

業ヲナスナク慎テ藩命ヲ俟ツベシ○十八日岡
 藩士十餘人モ亦國ヲ脱シテ京師ニ至ル○二十
 六日萩藩永井雅樂京師ニ至ル是レ萩侯雅樂ガ
 京情ヲ審ニスルヲ述バケレバ幕府乃チ之ニ
 内旨ヲ授ケ將ニ京師ヲ説カシメントスレバナ
 リ而シテ雅樂ノ京師ニ入ルヤ頻ニ議奏中山大
 納言等ニ開國論ヲ遊説スレドモ攘夷ノ說朝野
 ニ満ツル時ナレバ一モ之ヲ採用スルモノナク
 鞅々トシテ江戸ニ歸ル時ニ浪士之ヲ大津驛ニ
 要撃セント謀ルガ雅樂變ヲ察シ中山道ヲ下

永井雅樂

平野次郎義

ル後チ使事ノ成リルヲ以テ萩侯邸内ニ禁錮
 セラレ明年二月ニ至テ死ヲ賜ハル○二十八日
 米公使登城ス國ニ歸ルヲ以テナリ此月九州ノ
 諸藩士亡命シ京師ニ上ラントスルモノ多ク是
 ニ至テ大阪ニ會スルモノ數百人ニ至ル○四月
 六日島津泉州久光ハ修理大夫茂久ノ父ナルガ
 故アリテ江戸ニ下ラント播州姫路ヲ過キリシ
 カバ中山公ノ舊臣田中河内介策前ノ脱士平野
 次郎飯居簡平大谷雄作青山頼母等浮浪ノ徒二
 百餘人ヲ募リ尊王攘夷ノ兵ヲ舉ゲントセシガ

是ニ至リ幕吏ノ罪ヲ數メテ書ヲ泉州ニ出シ京師ニ奏シテ醜夷ノ親征ヲ促カサシメテ請フ其書ノ略ニ曰癸丑以來幕府失策シ屢々ヲ開港セバ外夷益猖獗ス誰カ切齒扼腕セザランヤ臣輩不肖ヲ顧ミズ同志ヲ糾合シ大藩ニ倚頼シ事ヲ舉ント謀レルガ君侯ハ英明特達固ヨリ臣等ノ望ム所ナレバ今ヨリ君侯ノ號令ヲ奉シ大阪ヲ拔キ彦根ヲ燒キ二條ヲ屠リ直チニ上京シテ幕吏ヲ攘ヒ公卿ノ幽閉ヲ解キ七道ノ諸藩ニ詔ヲ下シ鳳輦ヲ函嶺ニ奉シ幕府ノ罪ヲ征シ尋ヒテ

文世書性三編

外傳

外夷ヲ攘ハシ泉州之ヲ撫シテ伏見驛ニ引卒ス此巨魁ヲナス平野次郎ナルモノハ癸丑ノ年以兼尊攘ノ志ヲ遂ケント粉骨碎身シテ戊午ノ春本藩ヲ脱シ京師ニ來リ同志ヲ募ル時ニ幕制嚴密ナレバ僧月照ト身ヲ西國ニ潜メ屢々漂泊セシガ月照ハ幕吏ニ追ハレ遂ニ陸海ニ投死スレドモ次郎ハ身ヲ全フシ是ニ至テ此舉ヲ謀ルト云

野史氏曰余近世ノ史ヲ讀テ平野次郎ノ此舉ヲ誅レムニ及ビ未タ嘗テ嘆賞セザルナリ

外傳

卷之三

三十五

外傳

ルナリ夫レ次郎等ノ同志ヲ嘯聚シ島津泉州
 ニ要訴スル其事蹟頗ル粗暴無術ニシテ大事
 耐ルレテ能ハザルニ似タレドモ今已ニ此形
 勢ヲ馴致スレバ次郎ガ先見ノ明カニシテ違
 ハザルヲ善處ノ如シ然ラズ則次郎ハ真ノ豪
 傑ナルカ
 八日高智ニテ其藩士數人用人役吉田元吉ナル
 モ、ヲ殺シ脱藩シテ京師ニ至ル○九日淺野伊
 賀守江門ニ至ラント京師ヲ發ス京師ノ情態ヲ
 幕府ニ陳センカ為ナリ○十一日島津泉州浪士

變報

二百餘人ヲ率ヒテ伏見驛ニ至ル是ヨリ先ニ奉
 行林肥後守次郎等ノ此舉ヲ起ヒルヲ聞ケバ使
 ヲ京師ニ馳セテ所司代酒井若狹守ニ報告シケ
 ルが是日若狹守泉州カ浪士ヲ率ヒ來ルヲ聞キ
 愕然トシテ在京ノ幕吏ヲ集メ軍備ヲ整ヘテ二
 條城ヲ衛リ傳奏廣橋公等ニ因テ直ニ賊徒ヲ
 却ケント奏ス時ニ朝野誤リ認メテ兵乱ノ起ル
 トナシ諸民騷擾シ家ヲ捨テ逃走ス○十二日對
 馬守老中ヲ免セラル○十五日福岡侯江戸ニ下
 ル途中播磨ヨリ國ニ歸ル舊臣平野次郎等カ暴

島津泉州入京

舉アレルヲ聞ケバナリ○十六日島津泉州其臣二
十餘人ヲ率ヒテ入京シ書ヲ近衛公ニ呈シテ曰
幕府戊午ノ年以來勅諭ヲ奉ゼズ外夷ト盟約シ
妄ニ親王公卿ヨリ一橋水戸福井高智宇和島此
餘有志ノ諸侯ニ至ルマデ皆之ヲ禁錮シ天下ノ
物論騷然タルハ浪士等專横ノ説ヲ主張シテ大
老ヲ要撃シ外國旅館ニ侵入ス實ニ容易ナラザ
ル形勢ナレバ臣深ク怖ル遂ニ夷虜ノ術中ニ陷
ラント欲セルガ播州姫路ニ至テ次郎等ノ舉ニ

有馬新七

遇ヘリト其願書ヲ出ス時ニ朝廷浪士ノ暴戾ヲ懼
レ泉州ヲ止メテ之ヲ鎮定ヒシム○十八日京師
ヨリ老中ヲ召ス○十九日米公使登城ニ拜禮ヲ
ナス○廿二日大阪滞留ノ薩藩有馬新七田中鑑
助山寛次郎等八人次郎等ト同志ナレバ泉州
ノ因循ヲ憤リ逼テ事ヲ舉ント伏見驛ニ至ル○
二十三日島津泉州其臣奈良原喜八郎山口金之
助道嶋五郎兵衛等數十人ヲ伏見ニ遣リテ有馬
新七等ヲ諭セドモ敢テ從ハズ是ニ於テ喜八郎
大ニ憤怒シ撃テ之ヲ殺ス○二十五日幕府江戸

奈良原喜八郎
勇斷

近世書目録

三十七

幕吏・怯懦

二テハ名古屋老疾一橋刑部卿福井老疾土佐老
 疾京師ニ於テハ粟田宮鷹司近衛一條久我萬里
 小路等ノ慎ヲ宥メ蓋シ老中板倉周防守内藤紀
 伊守等浪士ノ京師ニ蜂起シ泉州ノ之ヲ指揮ス
 ルト誤リ聞クヤ大ニ恐懼シ以為和泉等勅命
 得テ関東ノ罪ヲ問ハントスルヲ因テ急
 二公卿諸侯ノ禁錮ヲ解クト云是日幕府令シテ
 曰関東ハ固ヨリ最慮ヲ奉ゼザルナキニ近來公
 武ノ間齟齬スルハ全ク情實ノ通徹トガレナリ
 故ニ今般速ニ上洛シ廟堂ノ熟算アリテ以テ皇

萩侯世子入京

島津泉州三郎ノ名ヲ賜ハ

威ヲ主張シ上ハ震襟ヲ慰メ下ハ萬民ヲ安ンゼ
 シメン上下鎮定シテ武備ヲ嚴メヨ時ニ江夏
 壯七郎ナルモヨ京師ニ於テ書ヲ島津和泉ニ呈
 シ謁見シテ方今ノ一策ヲ献ヒント請フ○二十
 ハ日萩侯世子嚮ニ歸國セント江戸ヲ發セルカ
 是日京師ニ至リ天機ヲ伺フ是ヨリ先ニ萩侯江
 戸ニアリ屢幕府ヲ規諫シ京師ヲ遵奉ヒントヲ
 勸メケレバ是ニ至リ朝廷萩侯世子ニ勅シテ島
 津泉州ト共ニ浪士ヲ鎮撫セシム此時泉州日夜
 王事ニ精勤スレバ兒島備後三郎高德ノ忠功ニ

均シキトテ泉州ヲ攻メテ三郎ト称スベキ旨獻
 慮アリケレバ是ヨリ島津三郎ト称セリ○五月
 三日幕府若松侯ニ命シ政事ニ預ラシム○七日
 一橋刑部卿名古屋老侯福井老侯登城ス是日福
 井老侯政事ニ預ルベキ旨ヲ命セラレ○八日幕
 府関宿侯ニ命シ京師ニ行カシム○京師ノ老
 中ヲ召スニ應セン為ルガ関宿侯途中駿府ニ
 テ京師ノ情態ヲ聞キ大ニ驚怖シ遂ニ病ト称シ
 テ江戸ニ歸レ○二十二日大將軍親ラ登城ノ諸
 侯ニ各所見ヲ建論スベキ旨ヲ令ス時ニ朝廷大

勅使大原正三

原從二位重徳ヲ勅使トシテ東下セシメトシ
 重徳ノ正三位左衛門尉ニ叙任シ此日發軔セシ
 ム島津三郎士卒六百餘人ヲ率ヒ之ヲ衛ニ我備
 儼然頗ル觀ルベシ此時教侯ハ京師ヲ守衛ニ武
 威ヲ天下ニ耀ラシ朝威日ニ熾ナレバ在京ノ幕
 吏等所在潛居シ人其居ルヲ知ラザルニ至ル尋
 テ幕府若狹守忠義ノ所司代ヲ免ジ松平伯耆
 守ヲシテ之ニ代ヲシム伯耆守モ亦京師ノ形勢
 ニ怖レ病ト称シ辭職ス時ニ諸藩競テ勤王佐幕
 ノ説ヲ唱ヘ書ヲ幕府ニ出ス徳島侯建言ノ略ニ

曰幕府ノ開港通商ヲ許サル、モ廟堂ノ熟計ニシテ當然ノ事ナレドモ之ヲ過ルニ其道ヲ失ハ彼ノ猖獗スルモ偶然ニアラズ而シテ天下ノ士民之ヲ憤激シテ輦轂ノ下ニ騷擾シ成ハ關東ニテ當路ノ人ヲ要撃ス殆ト瓦解ノ勢ナリ故ニ物論ヲ鎮定シ夷虜ヲ遇スルニ其道ヲ得ルニハ方今ノ急務ナリ幕府急ニ尾水越一橋田安公等ヲ輔佐トナシ松平春嶽松平閔史等皆賢明レバ之ヲ關東ニ召シ此餘英明ノ諸族ヨリ士民ニ至ルマデ皆拔擢シ以テ全國ノ士氣ヲ振作セ

バ外夷ノ虚喝何ゾ懼ル、一是ヲニハハ條時宗スラ外蒙古ノ強敵ヲ挫キ内聚情ヲ鎮靜シ況シテ堂々タル幕府ニ於テヲヤ臣近頃皇妹降嫁ノ事ニ依テ將軍ノ上洛近キニアラン、開クヨレ希有ノ盛典ナレトモ經費頗ル莫大ナレバ方今政務多端ノ秋ニ當リ替ノ之ヲ延シ急ニ軍艦砲臺及ヒ砲礮ヲ豫備セヨ且方今ニ於テ京師ノ俸禄モ欠乏ノラン幕府急ニ之ヲ増加セヨ王室ノ山陵モ荒蕪ニ湮没セリコレ亦急ニ修メガムベクアラズ而シテ尚急務ナレハ五畿七道ノ大藩ニ

津侯、建書

命シ軍艦炮礮ヲ製造セシメ以テ他日ノ不虞ニ備ヘシコトヲ此時津侯モ亦建言シテ曰幕府嚮ニ勅許ヲ俟タズ亞國ト條約ヲ結ビ妄ニ賢明ノ親藩ヲ擯斥シ忠胆義肝ノ士ヲ刑ニ處シ遂ニ櫻田坂下ノ禍ヲ醸ヒリ而シテ外夷ヲ遇ス、猶優渥ナレバ爾來釀成スル所ノ禍實ニ測ルベキコトゾ此時ニ當リ大將軍和官降嫁ノ為ノ速ニ上洛シ以テ深ク不遜ノ罪ヲ謝シ公武ノ合体ヲ天下ニ示シ物論ヲ鎮定スベシ然レ後外夷ヲ攘除シ征夷大將軍ノ名ニ負カズ神祖ノ鴻業ニ劣ラザル

建書

津侯、建書

長州侯が肥後侯に贈る書

ベシ○二十七日佛公使登城ス此月萩侯書ヲ熊本侯ニ呈シテ曰方今内外多端ノ際ニテ公武不和ナレバ僕屢幕府ニ京師ヲ遵奉シ物論ヲ鎮定シ國基ヲ立シ、後千關鎖ハ時宜ニ随フベキ旨ヲ建言セルガ此項ニ至リ幕府僕ヲシテ公武合和ノ事ニ預ラシメントス請フ閣下モ亦腹臆ナク高論ヲ吐キ共ニ盡力アラントテ是ヨリ先ニ熊本藩一同其藩主ニ上書シテ曰聞ク近頃薩長ニ藩力ヲ協テ京師ヲ守衛シ攘夷ノ舉ヲ起サントス筑前肥前土州阿州因州等數十侯モ亦相共

熊本藩一同、建論

勅書ノ略

近衛公關白ト

之ヲ助ク此時ニ當リ苟モ皇國ニ生ル、モノハ
 誰カ憤激セザラシヤ請フ當藩モ其斷勇決シ以
 テ天下ノ義舉ヲ起サシマラシム○六月朔日幕府大
 將軍近日入洛スベキ旨ヲ令ス是日九條公關白
 ヲ免ゼラレ近衛左大臣忠熙之ニ代ル○二日關
 宿茂老中ヲ免ゼラル○七日勅使大原左衛門尉
 江戸ニ至ル是日萩侯江戸ヲ發ス○八日幕府軍
 艦ヲ以テ志摩伊勢尾張海ノ測量ヲナスベキ旨
 ヲ令ス○十日大原左衛門尉登城シ勅書ヲ出ス
 其略ニ曰將軍諸侯ヲ率ヒ急ニ上洛シテ接夷ノ

振本鑑次郎等ノ洋行

議ヲ決シ上神祖ノ震怒ヲ慰メ下士民ノ歸嚮ヲ
 知ラシメヨ且豊太閤ノ舊典ニ依リ沿海ノ大藩
 ヲ選ヒ五大老トナシ一攝州郡卿ヲ舉テ幕府ノ
 輔佐トナシ越前前中將ヲ大老ニ任シ内外ノ政
 ヲ詢リ左衽ノ辱ヲ受ケガラシメヨ○十三日英
 公使松山侯邸ニテ應接ス○十四日英米佛蘭人
 江戸ヨリ横濱ニ行ク府下ノ騷然タルヲ以テナ
 リ○十八日幕府内田恒次郎澤太郎左衛門伊東
 玄伯林研海榎本鑑次郎赤松大三郎等ヲ葡國ニ
 遣リ航海術ヲ學ハシム此時同國ニ囑シ軍艦ヲ

造ラシメケルガ此艦ノ成ルヤ内田榎本等ノ業
 大ニ進ミ後チ慶應二年ニ至テ之ヲ率ク歸ル
 開陽丸ハ即チ此艦ナリ○二十二日松本藩伊藤
 軍兵衛英人ノ旅館高輪東禪寺ニテ英人二名ヲ
 殺シ自裁ス初松本侯ガ東禪寺ノ警衛ヲナ入軍
 兵衛モ亦衛士トナリ常ニ主家ノ外國人ヲ衛ル
 ヲ歎息シ事ヲ以テ其警衛ヲ止メシメント欲セ
 ルガ英人通同寺ノ庭上ヲ過ルヤ禮ヲ軍兵衛ニ
 失フ軍兵衛乃チ夜ニ乗シ事ニ及ブト云○晦日
 小濱侯所司代ヲ免セラル官津侯之ニ代ル是月

伊藤軍兵衛

星飛下タシ

朝廷水戸前中納言齊昭ノ忠誠ヲ善ミシ從三位
 大納言ヲ贈リ故三條内大臣實萬モ壬事ニ精勤
 スルヲ以テ其功勞ヲ賞シ廣幡亞相高辻少納言
 等ニモ右大臣ヲ贈ル○七月朔日大原左衛門尉
 登城ス大將軍勅意ヲ奉ズキ旨ヲ答フ○六日
 幕府朝旨ヲ奉シ一榻慶喜ニ再相續ヲ命シ將軍
 ノ後見トナス是日宇都宮藩大橋順藏ヲ其主家
 ニテ禁錮セシム○九日幕府福井老侯ヲ政事總
 裁職トナス○十五日夜星ノ飛フ雨ノ如ク其
 數幾十萬ヲ知ラズ○十六日萩侯學修院ニテ公

島田左兵衛

天誅黨ノ起ル

武一和ノ事ヲ建論ス○二十日飢肥藩安井仲平ニ命シテ大將軍ニ謁セシム○二十一日京師ニテ諸藩ノ脱士九條家ノ臣島田左兵衛ヲ斬リ首ヲ四條河原ニ梟シ其前ニ罪状ヲ掲テ此者ハ大逆賊彦根藩長野主膳ト心ヲ協セ奸曲ヲ構ヘ天地モ容レザル大奸國賊ナリ因テ誅戮ヲ加フト書キリ初戊午ノ秋左兵衛幕府ノ為ニ主膳ト同意シテ京師ニ來リ公卿士民ノ慷慨義烈ナルモ數十人ヲ誑戮シケレバ是ニ至テ浪士ノ為ニ其仇ヲ報セラル之ヲ天誅黨ノ始トス○二十三

彗星西北ニ見ハル

日英人松山侯邸ニテ世態變革ノ事ヲ論ス是月下旬ヨリ彗星西北ニ見ハレ八月中旬ニ至リ西方ニ移リ後ヲ見エズ天下以テ西國變アルノ凶兆トナス○八月三日幕府慶見島侯ニ其藩士振次郎ヲ國法ニテ刑スベキ旨ヲ命ス○十二日大原左衛門尉登城ス○十六日大將軍大原左衛門尉ヲ演殿ニ饗ス此日関宿侯加増一萬石ヲ減ゼラレ平侯ト共ニ國邑ニ屏居スルヲ命ゼラル○十八日萩侯世子勅命ヲ以テ江戸ニ至ル○二十日朝廷九條久我千種岩倉富小路中務等ノ諸

生麥村ノ變

萩原世子

卿ニ蟄居落飾ヲ命ス或ハ云フ関東ノ議ニ與リ
 不當ノ事アルヲ以テナリ○二十一日島津三郎
 大原公ニ先ツテ江戸ヲ發シ武州生麥村ニ至ル
 英人馬上ニテ其前驅ヲ遠ル從士等無禮ヲ怒リ
 直チニ英人四名ヲ斬ル是ヲ以テ島津家ノ武威
 益天下ニ振フ○二十三日大原左衛門尉江戸ヲ
 發ス幕府ノ勅旨ヲ遵奉セルヲ以テナリ是日英
 公使松山侯邸ニテ生麥村ノ事ヲ議論ス○二十
 三日幕府新見伊勢守ニ命シ大將軍ニ代テ水戸
 烈公ノ墓ヲ拜セシム○二十四日萩原世子登城

薩長土三藩

會津侯京師中
護職ニ任セラ

シテ勅書ヲ出ス水戸烈公ニ官ヲ贈リ戊午以來
 罪ヲ得ルモノヲ赦ス等ノ事件ナリ云此日
 官津侯所司代ヲ免セラレ長岡侯之ニ代ル○二
 十五日高智侯京師ニ朝ス朝廷之ニ命シテ薩長
 兩藩ト同ク輦轂ノ騷擾ヲ鎮撫セシム是ヨリ時
 人諸侯ノ威望アルモノヲ語レバ必ズ薩長土三
 藩ヲ稱ス○二十八日長藩來原良藏ナルモノ外
 國人ヲ斬ラント横濱ニ行キ同藩ノ為ニ捕ハレ
 テ遂ニ自刃ス○閏八月朔日幕府京師ニ守護職
 ヲ置キ松平肥後守ヲ之ニ任ス○三日幕府彦根

長野主膳

御刀ヲ三郎ニ賜フ
戸田和三郎大和守トナル

其藩士長野主膳ヲ嚴刑ニ處スベキ旨ヲ命
ス○六日大原左衛門尉京師ニ歸ル島津三郎ニ
尋ヒテ至ル朝廷大原及ヒ島津家ノ勞功ヲ賞シ
大原左衛門尉ニ直衣ヲ免シ島津三郎ニ從五位
下大隅守ニ叙任ノ宣下アルベキ旨ヲ關東ニ報
ス後見職慶喜總裁職春嶽生麥ノ事アルヲ以テ
警ノ之ヲ延サント請ヒケレバ朝廷乃チ金飾ノ
御刀ヲ三郎ニ賜フ是ヲ以テ三郎大ニ望ヲ失フ
ト云○八日宇都官侯山陵ノ荒蕪ニ委ヌルヲ慨
シ其一族戸田和三郎故典ニ談博ナルヲ以テ之

通事傳二卷之三

大正十一年

ヲ修メシメシテ幕府ニ建言ス幕府之ヲ京師
ニ奏請シ遂ニ和七郎ヲ戸田大和守トナシ山陵
奉行ニ任シ其事ヲ督セシム是日幕府東禪寺ニ
テ殺サレタル英人ノ親族ニ洋銀三千弗ヲ與フ
○九日魯人登城シ大阪等ノ開港延期ヲ諾スル
返書ヲ出ス○十五日幕府諸侯ニ令シテ國威ヲ
更張スルヲ建白セシム此日小濱侯領地一萬
石ヲ減シ慎ヲ命セラル○十七日幕府鉄砲ヲ具
ヘ諸國ノ関所ヲ通行スルヲ許ス○二十日彦
根侯京師ノ護衛ヲ免ゼラル○二十一日京師ニ

通事傳二卷之三

大正十一年

本間精一郎

テ浪士等越後人本間精一郎ナルモノヲ殺シ其
 首ヲ四條河原ニ棄ス蓋シ精一郎匪鳴ヲ以テ衆
 人ヲ威トシ推勢ニ倭護レテ薩長出三藩ヲ讒訴
 レ姦謀ヲ企テシテ以テナリ○二十二日幕府天
 下ニ令レテ諸侯ノ交代ヲ緩シ夫人及ビ嫡子ヲ
 本國ニ就カシメ衣服并ニ從僕ヲ省略セシム初
 幕府ノ制年年ニ諸侯ヲ交代セシメ且其妻子ヲ
 江戸ニ置カシメテ以テ藩勢ヲ抑制シテ其是
 至リ後見慶喜總裁春嶽等邦内ノ疲弊ヲ厭ヒ
 務テ虛飾ヲ廢シ國ノ富シ兵ヲ強クセシト此大

幕府ノ大改革

改革ヲ出ダス蓋シ從前江戸ノ繁昌スルハ諸侯
 在府ニヨレシガ是ニ至リ家康公以來三百年

繁昌モ僅カ一朝ノ間ニ寂寞ノ地トナル今ニ
 至ルニテ平素ノ服ニ羽織小袴高袴ヲ用ユルモ

此時ナリ始ルナリ

野史氏曰客アリ余ニ問フテ曰夷船渡船以來
 幕吏其虛鳴ニ怖レ因循姑息ニ以テ天下ノ人

心ヲ離散シ幕威ヲ衰頽セシムル既ニ如何ト
 スルニシテ而今ノ執政ハ皆賢明ナル

ニ猶此令ヲ出シテ益幕威ヲ殺クハ如何余答

テ曰方今尊王攘夷ノ説天下ニ満テ朝威日ニ熾ナレバ幕府モ亦此時ニ當リ深ク既往ノ愆ヲ悔ヒテ朝廷ヲ遵奉シ以テ人心ヲ服従セシメント欲ス故ニ天下ノ疲弊ヲ厭ヒ國ヲ富シ兵ヲ強クスルノ良策ヲ施シテ朝命ニ未ダ下ラザルニ先ツテ此令ヲ發スナリ客唯ヤトシテ退ク

二十三日京師ヲテ浪士等九條家ノ臣宇野玄蕃ヲ暗殺シ其首ヲ松原河原ニ梟シ側ニ此モ嶋田左兵衛ト同志ニテ主家ヲ不義ニ陷シタル大

宇野玄蕃

白明ノ文吉

逆賊ナレバ天誅ヲ加フト掲書ス○二十四日島津三郎京師ヲ發シ國ニ歸ル位階昇進ノ事ニ意ノ満タガアルアレバナリ○二十九日浪士等又三條河原ニテ目明シ文吉ナルモノヲ裸体ニシ其兩足ヲ縛リ絞殺ス嶋田ノ徒ナルヲ以テナリ○九月四日朝廷高智侯ニ命シテ其老矣ト交代セシム○六日龍野侯老中ヲ免ゼラル○七日幕府明年二月大將軍上洛スニキ旨ヲ令ス是日名古屋老侯從二位大納言ニ叙任セラレ○八日朝廷攘夷ノ為ニ勅使ヲ東下セシメント議ス○十二

行書青下編

四八

渡邊金三郎等
歿人共

日幕府後見一橋慶喜ニ命シ京師ニ行カシム
 二十三日浪士等徒石部ニテ與カ渡邊金三郎同
 心森孫六大河原十藏ヲ殺シ翌日其首ヲ洛東粟
 田口ニ吊ス長野島田等一徒ナレバナリ此時戊
 午以來ノ事ニ關スル幕吏ハ皆驚怖戰慄シテ
 ガ同心小寺仲藏ナルモノハ割腹シテ之ヲ謝
 高屋助藏ハ髮ヲ剃テ身ヲ脱ス此餘或ハ遠國ニ
 行キ或ハ都下ニ潛居スルモノ其數ヲ知ラザル
 至リ浪士ノ權勢日ニ熾ニシテ益奸佞ヲ戮シ
 姦商ヲ捕フレバ物價之ガ為ニ下落ス是ヲ以テ

萬民陰ニ浪士ヲ貴ビ往々正義ノ士天忠組ナド
 稱ス○二十五日朝廷九條父子及ヒ十種自觀
 岩倉友山富小路鼓雲ヲ洛外ニ居住セシム此月
 川崎ヨリ程ヶ谷マテ五町毎ニ見張所ヲ置ク外
 國人ノ請フ所ナリ○十月朔日幕府後見一橋ノ
 上京ヲ止ム○九日濱松侯老中トナル○十日大
 將軍巢鴨邊ニ微行ス○十一日京師ニテ浪士等
 亥酉毒三郎半兵衛ヲ二條河原ニ縛ス○十二日
 勅使三條中納言實美副使姊小路少將公知京師
 ヲ發ス高智侯之ヲ警衛ス○十三日英人山形侯

近世事情三編 卷之三

四九 大角氏鑑

後醍醐天皇廟
遷御

邸ニテ生麥村ノ事ヲ議ス○十四日久留米侯京師ニ至ル○十五日鳥取廣島ニ侯京師ニ至ル此日幕府徳島侯ニ竟見ヲ建言スベキ旨ヲ命ズ○十八日芳野後醍醐天皇ノ廟故ナク震動レ遊ニ破裂ス時ニ幕府大將軍入朝ノ諸事ヲ格外ニ省キ并ニ通行ノ道路ニテ人家窓戸ヲ閉ルニ及バザル旨ヲ令ス○二十一日鳥取侯江戸ニ至ラシト京師ヲ發ス勅使ヲ輔クベキ勅命アルヲ以テナリ○二十三日處士吉田真之介ニ命ヒ大將軍ニ謁セシム○二十七日岡侯幕命ニ應ヒ江戸ニ

岡侯浪士ニ退
ラシ

下ラント伏見驛ヲ過キ京師ニ朝セザラシトス時ニ勤王ノ諸藩京師ニ上リ國家ノ為メ盡力アリシニ岡侯近驛ニ至リ天機ヲ伺ハザルハ朝廷ヲ蔑如スルナリトテ粟田院等諸藩士ヲシテシテ如サシム岡侯乃チ入洛シ朝命ヲ奉ズ○十一月朔日後見一編慶喜中納言ニ任セラレ○七日鹿兎島侯徳島侯京師ニ至ル此日彦根藩加藤吉太夫濱松侯邸ニ至リ自殺シ歎願ヲナス主家ノ京師守護ヲ罷メ村替セラル等ノ事ヲ以テナリ○十二日故鹿兎島侯從三位權中納言ニ叙任セ

五年

神奈川ノ事成
ラズ

ラル○十三日長土ノ藩士神奈川ニ集リ横濱ヲ
焼シト謀レドモ遂ニ果サズ○十五日京師ニテ

長野主膳者
ナル

浪士寺彦根藩長野主膳ノ妾ヲ縛シ三條河原ニ
肆ス○十六日又金閣寺内多田帯刀ヲ殺シ粟田

口ニ集ス○二十日幕府故井伊中將ノ罪ヲ數ヘ

テ十萬石ヲ削リ併テ籍江侯ハ一萬石関宿侯モ

一萬石平侯ハ二萬石ヲ減シ小濱老侯佐久良及

ニ関宿老侯等一妻居ヲ命ズ皆中將ノ黨ナレバ

ナリ○二十二日幕府御臺ヲ復タ和宮ト稱ス○

高松老侯等
ヲル

二十三日幕府戊午京囚ノ事ヲ以テ高松老侯龍

勅使三條中納言

野老侯官津彦沼津老侯淺野伊賀守松平出雲守

大久保越中守等數十名ヲ罰ス○二十七日三條

中納言妙小路少將登城シ勅旨ヲ宣テ曰驅夷船

來以後宸襟ヲ惱サセラレバ幕府急ニ舊弊ヲ除

キ政体ヲ改革シ且明春上路ノ後諸藩ヲ率ヒ夷

虜ヲ攘ヒ以テ厭慮ヲ安ンゼヨ○十二月四日幕

府三條中納言等ヲ本城ニ饗ス○五日大將軍勅

意ヲ遵奉スベキ旨ヲ一條中納言等ニ答フ此日

佐賀老侯京師ニ至ル○七日三條中納言等江戸

ヲ發ス萩侯世子之ヲ擄ル○十二日幕府飲肥藩

御出燒亡ス

安井仲平山形藩益谷甲藏田中藩芳野正藏ヲ儒者トナス○十三日品川御殿山英人ノ旅館燒亡ス此館ノ成ルヤ頗ル美麗ヲ盡セルが未ダ英人ノ移ラザルニ當リ此災ニ罹ル蓋シ浪士ノナス所ナラシ○十四日幕府諸侯ニ攘夷ノ策略ヲ建言スベキ旨ヲ命ズ○十五日朝廷水戸侯ニ戊午ノ勅諭ヲ厚ク奉ズヘキ旨ヲ命シ幕府ヲシテ之ヲ諸侯ニ公告ヤシム○十七日幕府一橋公ヲシテ大阪ヲ巡視セシム○十八日幕府徳島侯ニ陸軍總帥ヲ命ス○二十一日江戸ニテ浪士等熱本

阿州侯陸軍總帥トナシ

橋次郎要殺ス

藩横井平四郎ヲ斬ラントス平四郎幸ニシテ遁ル○二十二日又浪士等橋次郎ヲ九段坂上ニ要殺シ翌日日本橋ニ其罪條ヲ掲ケテ曰次郎ハ安藤閣老ノ命ヲ以テ廢帝ノ例ヲ引ケル逆賊ナレバ天誅ヲ加フナリ是日壬生ニテ藩士十六人其家老鳥井志摩ヲ殺ス○二十三日三條中納言等京師ニ歸ル○二十九日幕府薩藩川本幸民杉田玄端津山藩箕作玩甫ヲ洋書調所教授トナス此日大將軍明年海路ヨリ入朝スベキ旨ヲ令シ後又陸行トナス是歲諸藩ノ入京セルモノ凡七十

丁酉三月

卷之三

五二

餘藩ニ及フ旗下一士ニ至テハ枚舉スベカラズ
是ヲ以テ京師ノ繁昌前古未曾有ト云

近世事情二編卷三終



